

# 「上流学校」の大衆化と教養主義

## ——東京女学館館長・澤田源一の学校経営——

濱田英毅

### 論文要旨

戦前期の日本において、指導的立場を占めた身分的・政治的・経済的・軍事的・知的エリート層の集合体を上流階級とするならば、その子弟・子女の育成、及び新たに上流階級に加わるべき人材の育成を目指した学校を、上流学校と総称することができる。しかし、敗戦により上流学校は大衆化を余儀なくされた。大衆化は、失敗すれば低俗化の危険性を孕む。そこで、上流学校が建学の精神に背かずに大衆化を成し遂げつつ、その文化資本（品性）を守るためにどのような対策をとったのか。上流女学校として学習院女子部と並び称された東京女学館を事例に取り上げ、東京女学館の学校経営を専断的に担った館長・澤田源一の個人像を分析することで明らかにする。特に、内務官僚、文部官僚、直轄学校長としての活躍や、学内会報誌『菊』上で展開した建学の精神の再解釈を考察対象とし、上流学校の大衆化について分析する。

**キーワード**【内務官僚、高松高等商業学校、東京女学館、エリート教育、唯心論】

## はじめに——近代日本における「上流学校」の役割——

戦前の日本で指導者的立場を占めた、身分的・政治的・経済的・軍事的・知的エリート<sup>1)</sup>層の集合体を上流階級とするならば、その子弟・子女の育成、及び新たに上流階級に加わるべき人材の育成を目的とした学校を、「上流学校」と総称することができる。身分的エリートの学校としては学習院があり、政治的・知的エリートの学校としては旧制高等学校や旧帝国大学、経済的エリートの学校としては慶應義塾や官立高等商業学校、軍事的エリートの学校としては陸軍士官学校・海軍兵学校などが有名である。上流階級の構成員は、具体的には皇族・華族、政治家、財界・実業界、軍人、官僚、学者といった社会集団であり、個人レベルまで掘り下げるならば、『日本紳士録』や『人事興信録』に収録されている名士がそれに相当する<sup>2)</sup>。近代日本において、こうした指導者的立場を占める上流階級への仲間入りを果たすためには、余程の才覚ある立志伝中の人物でない限り、元々上流階級に属しているか、あるいは上流学校を卒業することが必須であった。したがって、上流階級の分析には、上流学校の選抜方法や教育内容の分析が必要不可欠である。

また、近代日本の発展は、能力主義を抜きに語ることができない。例えば、英国の PAPRI

ック・スクールを初めとする西欧諸国の上流学校では、入学者を選抜する際に能力を最も重視していたわけではなかった。ところが日本の上流学校では、学習院などの身分的な制限を設けていた学校を除き、入学資格の判定は基本的に筆記試験であり、純粹に能力主義を貫いていた。つまり、能力次第で上流学校に入り、上流階級に加わり得る、身分・階級の社会的流動性が確保されていたのである。しかし、実際はその逆の傾向も強かった。上流階級の子弟・子女は、家庭環境を通じて個人のうちに蓄積された知識、教養、趣味、感性、動機づけなどの「文化資本」<sup>3)</sup>に恵まれていたため、能力主義を採った結果、却って元々上流階級に属する者が有利となった。能力主義は社会的流動性を確保する一方で、上流階級の再生産を促進したのである<sup>4)</sup>。さらに、上流階級は相互的に婚姻関係を重ね、層の厚い閥閥を形成した<sup>5)</sup>。これにより、上流階級の文化資本はますます強化された<sup>6)</sup>。女子の上流学校に期待された役割は、社会的リーダーの育成以上に、エリートの妻として振る舞うに足る教養を持ち、文化資本を子々孫々伝えていく能力を有する人材の育成であった。また、女性のコミュニティでは、夫の地位に応じて指導者的立場を任される。そうしたことに堪え得る人材を育成するには、やはりそれなりのエリート教育が必要であった。

しかし、敗戦後GHQによる占領統治の時代を迎えると、上流階級は民主化に反する存在として真っ先に指弾を受けた。米国トルーマン大統領が1945年9月6日に承認した文書、「降伏後における米国初期の対日方針」<sup>7)</sup>では、「日本国が再び米国の脅威となり、又は、世界の平和及安全の脅威とならざることを確実にすること」が「究極の目的」であり、「経済上の非軍事化」と「民主主義勢力の助長」が必要であると言明された。その結果、陸海軍の解体は勿論のこと、皇室財産・華族制度・財閥の解体、財産税の賦課、公職追放などが行われ、戦前の国家・社会において指導者的役割を担ってきた上流階級の存在価値は、徹底的に矮小化されたのである。

民主化の嵐の中で、上流階級の中でも特に身分的エリートの子弟・子女を教育対象とした上流学校の存続は厳しく、大衆化を受け入れる必要があった。ところが、大衆化をあまりにも推進すれば、建学の精神を損なう場合も考えられるだけでなく、学園が低俗化し、単なる普通の学校へと成り下がる危険性を孕んでいた。つまり、大衆化を推進しつつも、従来培ってきた学校精神（文化資本）を守ることが、上流学校に課せられた命題であった。具体的に言及すれば、指導者的立場の人材を育成していた上流学校の本質である、エリート教育やリーダーシップ教育の今後の在り方が、文化資本を維持する上で最大の鍵と位置付けられていた。

そこで本稿では、女子の上流学校の大衆化が成功した事例として、東京女学館を取り上げる。東京女学館は、「当時、東京第一の上流女学校であって、華族女学校、今の学習院女子部と対立した」<sup>8)</sup>存在であり、「華族女学校に対し民間華族女学校」<sup>9)</sup>と見做されていた、典型的な上流学校である。第一部第一節で、上流学校の本質であるエリート教育の目的を論じ

た上で、第二節より大衆化の推進を担った第8代館長・澤田源一<sup>10)</sup>の具体的考察に入る。澤田は昭和22年に副館長となり、さらに同年、館長に就任し、以来、昭和50年2月に死去するまで、実に30年近くにわたり館長を務めた人物である。後述するように、澤田は東京女学館の学校経営を専断的に担っていたため、澤田の思想、教育方針、学校経営方針を分析することで、東京女学館の学校経営の実像が明らかとなる。そのため、まず澤田の来歴を分析し、澤田の個人像を明確にする。特に、内務官僚・文部官僚・直轄学校長（中でも、高松高等商業学校長）としての経験は、澤田の思想形成に大きく影響を及ぼしたと考えられ、第二節から第六節にかけて詳細に検討する。第二部では、その来歴を踏まえつつ、東京女学館における澤田の学校経営について考察する。主な分析の材料として学内会報誌『菊』を用い、短期大学を設立して学校教育の体制が備わり、東京女学館の学校経営方針がほぼ定まったと考えられる昭和30年前後までの学内の動向を明らかにする。

## 〈第一部 澤田源一の個人研究〉

### 第一節 エリート教育の目的

エリート研究の先覚である麻生誠は、エリートが存在価値を有するための一般的条件として、①卓越した能力、②社会に対する奉仕精神、③社会の指導者としての自覚の3点を指摘した<sup>11)</sup>。①は、国家・社会に寄与すべき人材と限れば、国際的な常識・感覚・知識や、諸外国と対等に渉り合うための高度な専門的能力を意味している。少なくとも、日本が五大国の一角を占める昭和初期までは、西欧文化を積極進取し、富国強兵・殖産興業を実現して、西欧列強に伍する文明社会を作り上げることが、国家の最大目標であった。つまり、当時のエリートは国際社会に打って出るべき人材であるから、専門分野はそれぞれ違ったとしても、基礎的教養として国際的な常識・感覚・知識を備えておくことが、共通した前提条件であった<sup>12)</sup>。これがいわゆる教養主義であり、上流学校の教育の重点であった。旧制高等学校の教育プログラムのうち、外国語の比重がかなり高かったことや、どのような社会集団においても、優秀な人材はまず外国留学・海外赴任をすることが慣例であった事実を想起すれば、単に西欧文化への思慕<sup>13)</sup>というだけでなく、実際に国際性、及び国際レベルの専門能力がエリートの条件であったと充分理解できる。但し当時は教養教育を受けていることのみでも、エリートを選別する指標として意味を持っていた<sup>14)</sup>。

また、真のエリートは、①だけではなく②・③の意識を併せ持つことを求められた。いわゆる「ノーブレス・オブリージュ」の精神であり、日本語で言えば「藩屏」の意識である。当時、近代国家の完成には、国家・社会に寄与（奉仕）する精神が不可欠であると見做された。例えば、地方の行政を各地の名望家に行わせようとする「地方名望家論」<sup>15)</sup>や、儒教道徳に基礎を置き、天皇の代理として民を慈しむ精神で政治を行う「牧民官」の発想<sup>16)</sup>に、

そうした認識を見出すことができる。上流階級の義務としての「公」の意識<sup>17)</sup>、あるいはリーダーシップの意識であるともいえる。それを身につけるには、まず人格の練磨が必要であり、そのためには教養教育が必要であった。こうした公の意識がなければ、エリートはただの「学歴エリート」<sup>18)</sup>で終わってしまう<sup>19)</sup>。ゆえに、上流学校は学生各自の能力を開発するだけでなく、教養主義を通じて社会に対する奉仕精神や、社会の指導者としての自覚を養うことを目指したのである。

公に奉仕する国家的・社会的エリート養成の代表的学校が、学習院であった<sup>20)</sup>。学習院は明治10年<sup>21)</sup>に、旧公卿・諸侯など身分的エリートの子弟・子女の教育を目的として、華族会館が設立した私立学校であった。その後、華族の子弟・子女の育成がますます国家的な問題であるとして認識され、文部卿や宮内卿の監督下に置かれるなどの若干の制度変遷を経て、「専ら華族ヲ教育スル学校ニシテ普通ノ学校ト同シカラサル」<sup>22)</sup>という理由から、明治17年に宮内省管轄の官立学校となった。同年には「華族令」<sup>23)</sup>が施行され、旧来の身分的エリートに国家的な勲功のある者を加えた新たな身分、華族が創始された。来たる国会開設に当たり、華族は国家の健全な運営を保証する貴族院（上院）議員となることを期待され、次世代華族の育成が国家の命運を左右すると考えられた。そのため、華族の子弟・子女を教育する学習院は国家にとって極めて重要な存在となり、明治18年の「華族就学規則」では、学齢期の華族男子子弟の学習院入学が義務付けられた<sup>24)</sup>。以来、同校では貴族院議員・軍人・外交官の養成に留意した教育が行われたのである。また、女子教育は明治19年に官立の華族女学校として独立したが、明治39年に学習院の一部に戻り学習院女子部となり、大正7年に再び女子学習院として独立した<sup>25)</sup>。学習院の女子教育では道徳的な価値観が重視され、当時、一世を風靡した欧化主義とは一線を画していた<sup>26)</sup>。

一方で東京女学館は、伊藤博文や渋沢栄一、岩崎弥之助、外山正一など各界を代表する名士が創立委員となり、明治19年に創設された女子教育奨励会<sup>27)</sup>を基礎とし、「日本の貴婦人に欧米の貴婦人と同等なる佳良の教化及び家事の訓練を受け」させることを目的に、「東京に於て女子高等教育の学館を設立し各地方に於ても同様の学館の設置を奨励」する<sup>28)</sup>という遠大な理想<sup>29)</sup>のもと、明治21年に設立された学校である。新たな趣意書である「女子教育奨励会東京女学館規則書」において、設立目的の文句は若干変更され、「日本婦人をして欧米の婦人の享有する所と同等の教育、及び家庭の訓練を受けしむる」<sup>30)</sup>こととされた。教育対象が「日本の貴婦人」から「日本婦人」へとやや抽象化されたのは、一般庶民の子女まで対象を広げたためではなく、元公家や上級武士のような旧身分の出身者に加え、新たに勃興した実業界の出身者等にも門戸が開かれていることをアピールするためであると考えられる<sup>31)</sup>。また、同書では「本館は此目的を達せんが為め高等教育を主とするの講義を開きて生徒を教育し、又、社会交際の増進を主とする一の倶楽部を設く」<sup>32)</sup>と謳われた。つまり、高度な教養と品性を身に付けることで、国際的な社交に対応できる女子の育成が、目標とし

て掲げられていたのである。東京女学館の設立には、宮中内の漢学的素養に基づく道徳主義者に対抗する、伊藤博文をはじめとした欧化主義者の理想が反映されていたとも想像できよう。

## 第二節 澤田源一の来歴 ——東京帝国大学から内務官僚へ——

東京女学館館長・澤田源一の人物論には、官僚としての素地を培った内務官僚時代、教育行政の中核で精力的に働いた文部官僚時代、学校経営者として卓抜な能力を示した直轄学校長時代の検討が欠かせない。以下、順を追って澤田の来歴を検討し、澤田の思想、教育方針、学校経営方針の原型を考察する。

まず注目すべきは、極めて優秀な澤田の学歴である。戦前の官僚にとって、出世を左右する最大の要素は進学コース、学校の卒業成績、高等文官試験の成績であった<sup>33)</sup>。澤田の辿った学歴は、京都府立第一中学校、第三高等学校第一部甲類<sup>34)</sup>を経て、東京帝国大学法科大学政治学科というコースであり、官僚として最上の、第一高等学校から東京帝国大学法学部法律学科というコースに准ずる、限りなく最上の学歴であった。第三高等学校の同期生には、片山哲（内閣総理大臣）、村上義一（運輸大臣）、木下道雄（帝室会計審査局長官、侍従次長）などがおり、東京帝国大学法科大学政治学科の同期生には、津島寿一（大蔵大臣）、赤木朝治（内務次官）、そして木下道雄という錚々たる人物が名を連ねる。その中で澤田は、政治学科を119名中6番という成績で卒業した<sup>35)</sup>。しかし、高等文官試験（行政科）に合格したのは大正2年11月であり、他の同期生に比べやや遅れた。木下とは同年度の合格であるが、津島や赤木は既に前年度に合格している。それでも、おそらく学校成績が非常に優秀であったため青田買いを受け、澤田は他の省庁とは別格とされる内務省<sup>36)</sup>に入ることができた。しかし、鋭才の揃った内務官僚の中では埋没し、存在感を十分に発揮できなかったようである。

澤田の官僚としてのキャリア<sup>37)</sup>は、愛知県属としての見習いから始まる。大正3年に高等官となり、鳥取県理事官として赴任、そして大正7年に岩手県理事官となった。ここで視学官・学務課長となり、初めて教育行政に携わった<sup>38)</sup>。内務省から文部省へ転出の推薦を受けたのは、この時であった。内務官僚が他省庁に転出することは、内務官僚としての将来性が極めて有望とまではいえなかったことを示唆している。しかし、文部省で戦力になると見込まれたことは事実であり、官僚としての評価は比較的高かったことが分かる。実際に『内務省史』の統計<sup>39)</sup>を見る限り、内務省から他省庁への転出は出世と見做してもよかった<sup>40)</sup>。内務官僚は県知事などの勅任官ポストが多く、比較的出世の機会に恵まれていたが、全員が勅任官まで昇進できるわけではなかった<sup>41)</sup>。しかし、昭和2年までに他省庁に転出した内務官僚を見ると、驚くべきことにほぼ全員が勅任官まで昇進している。

官僚としての成功の指標は、一般的に勅任官、すなわち高等官二等まで昇進したか否かで

あったといわれる。俗にいう「三丁目一番地」とは、この分岐点を指す謂いである。官僚社会にあっては、官等の上下が全てであり、特に勅任官と奏任官の違いはひととき大きかった。高等官は、主に高等文官試験を突破した官僚で構成され、等級は一等から九等までである。三等から九等までが奏任官、一等と二等が勅任官であり、勅任官のうち特に重要な役職が親任官とされた。これらの名称の由来は、任命形式の違いにある。奏任官は、内閣総理大臣が天皇の裁可を得ることで任命されるが、勅任官は、さらに内閣総理大臣が官記に記名した上で御璽が押印された。親任官となると、天皇が直接任命する形式をとり、官記には御名記載とともに御璽が押印され、内閣総理大臣が副署した。天皇を頂点に戴く国家にあって、天皇との近しさに明確な違いの現れる勅任官と奏任官の差は、まことに重大であった。つまり、この時澤田は、内務官僚としての成功を諦める代わりに、官僚として成功する絶好の機会を得たのである。

### 第三節 文部官僚への転出

文部省が増員を決定した経緯の一つに、大正7年に発足した原敬内閣の「四大政綱」がある。教育制度の改善、交通機関の整備、産業及び通商貿易の振興、国防の充実が目標として掲げられ、教育制度の改善の一環として高等教育機関の拡充整備が行われることになり、文部省は機構の拡大と、それに伴う人員の確保を要したのである。そこで当時、内務官僚である地方官のうちから若手官僚を転属させることになり、選考の結果、澤田がその一人に選ばれた<sup>42)</sup>。政友会は党勢拡大のため従来から財政積極主義であったが、日露戦争時に発行した外債の元利払いが残っており、思い通りに実現できなかった。しかし、第一次世界大戦の勃発により輸出が急増し、税収も大幅に改善されたため、当時、積極主義政策を取るには最高の環境が整っていたのである<sup>43)</sup>。

文部省に転出した澤田は、大正8年6月、専門学務局第二課長に任じられた。澤田と東京女学館をつなぐ人脈は、ここから生まれた。人事選考の際に澤田の文部省入りを勧めたのが、当時、文部省大臣官房文書課長であった関屋龍吉<sup>44)</sup>であり、澤田の上司に当たる専門学務局長は、後に東京女学館の第7代館長となる松浦鎮次郎<sup>45)</sup>であった。専門学務局は、直轄の大学と高等学校を除いた外国語学校、美術学校等の特種の直轄専門学校、その頃出来た帝国美術院の仕事のほか、公私立の専門学校及び各種学校すべての監督事務を担当した<sup>46)</sup>。大正7年、高等教育機関の大規模な拡充のために「大学令」<sup>47)</sup>が改正され、数多くの公私立の専門学校が大学昇格を果たした。官立では東京高等商業学校が東京商科大学（現在の一橋大学）に、私立では早稲田や慶應義塾が大学に昇格したのをはじめ、続々と新たな高等教育機関が設立された。したがってこの当時、専門学務局は文部省にとって花形の部署であり、自然、その担当者であった澤田にも注目が集まったと考えられる。以後、澤田は文部省の要職を歴任する。専門学務局第二課長を2年間つとめた後、大正10年7月、大臣官房文書課

長となった。その後、大正 11 年 4 月に海外出張を命ぜられ欧米各国を視察して回り、帰国後の大正 12 年 8 月、普通学務局第一課長となった。そして、大正 13 年 5 月には関屋の後任として大臣官房秘書課長となり<sup>48)</sup>、岡田良平・三土忠造・水野錬太郎の三大臣に仕えた。秘書課は人事を掌るので、「大学総長や直轄学校長等の出入が繁く、そういう人達の多くとも知り合う機会を得て、幅広い人脈の形成に役立ったという<sup>49)</sup>。

#### 第四節 直轄学校長としての学校経営——高松高等商業学校長としての成功と教訓——

秘書課長となった澤田は、既に高等官三等一級であり、次は高等官二等、すなわち勅任官への昇叙か、あるいは休職しかなかった。そこで、直轄学校長である高松高等商業学校長へ転じ、勅任官となったのである。文部省の中枢からは外れたものの、勅任官の地位は澤田の自尊心<sup>50)</sup>を満足させるに充分であった<sup>51)</sup>。高松高等商業学校（以後、高松高商と略記）は、大正 12 年に創設された比較的新しい学校である。澤田は昭和 2 年 8 月に第 2 代校長となり、昭和 14 年 4 月まで在職した。学校経営者としてのキャリアがここから始まった。

澤田が在職した期間、高松高商は非常な発展を遂げた。それは澤田の学校経営手腕による面<sup>52)</sup>も大きく、高松高商の校史における澤田の評価は極めて高い。「第 2 代沢田校長が来任の前後を境目として、学園は創設時代から発展充実時代に移行し、昭和 14～15 年ごろ時局がとみに重大化し、暗雲が学園をまったく蔽いつくすようになるまで約 10 年間、一応“黄金時代”が継続したとみることは、学園史の区分として便宜だろう<sup>53)</sup>と位置付けられている。

高松高商の校風は「創立期以来醸成されてきたリベラルな学風」が基底にあり、官立の学校として「上意下達の官制組織に添わざるをえない運命をもちながらも、全体としてはなお学園を支え」ていたという。そのため、「すでに拡充された定員をみたした教官団の家族的結束はその面で暗黙の裡に固く」保たれており、学会に問題を投ずるような優れた研究が生み出された。その研究成果は、文部省成人講座<sup>54)</sup>や教育講座・映画会・校外講演活動を通じて、地域社会に還元された<sup>55)</sup>。また、学内においても教官たちは学内交友会（学友会）<sup>56)</sup>の運動部・文化部活動に協力し、生徒と「無類の親睦」を深めた。その結果、学内交友会の活動は活況を呈し、水泳部・剣道部・籠球部などは全国大会制覇を遂げた<sup>57)</sup>。学友会以外の文化活動に対しても教官たちは協力的で、こちらも充実した成果を見せた。例えば、昭和 11 年の高専対抗英語弁論大会では高松高商 ESS が優勝した。以上のように、学生生活を謳歌できる環境が整えられた上に、就職・進学実績も非常に優れていた。これは、澤田が「随分東奔西走<sup>58)</sup>して、知己を中心に就職のための運動を繰り広げた<sup>59)</sup>と同時に、生徒に対しては「言語・拳止・所謂エチケットと称するものの一斑に迄も及んだ」指導を行ったことも大きい<sup>60)</sup>。こうした努力により就職率は毎年 100% 近くまで上昇し、大学への進学者も続出した。卒業生として多くの名士を輩出したことが、澤田の実績を物語っている。高松高商

(表1) 昭和10・11年度全国官立高等商業学校入試競争率

学校名	班別	募集人数	志願者数 10年度	志願者数 11年度	志願者数 増減	競争率 10年度	競争率 11年度
長崎高商	前	260	1,489	1,654	+165	5.7	6.4
山口高商	前	220	1,594	1,266	-328	7.2	5.8
小樽高商	前	220	1,127	1,510	+383	5.1	6.9
名古屋高商	前	210	1,412	1,472	+60	6.7	7.0
福島高商	後	150	819	997	+178	5.5	6.6
大分高商	後	150	1,225	1,480	+255	8.2	9.9
彦根高商	前	150	1,219	1,123	-96	8.1	7.5
和歌山高商	前	150	908	1,037	+129	6.1	6.9
横浜高商	前	150	1,444	1,256	-188	9.6	8.4
高松高商	後	150	1,516	1,635	+119	10.1	10.9
高岡高商	後	150	841	1,134	+293	5.6	7.6

(出典)『又信回顧三十五年』p.53を参考で作成。

は25期、合わせて約4000名が卒業したが、そこから内閣総理大臣1名(大平正芳<sup>61)</sup>、県知事1名(白石春樹)、副知事2名(井上房一、小野年之)をはじめ、数百名規模の会社役員を生み出した<sup>62)</sup>。高松高商は新しい学校であったが、優れた学校経営により高松高商には入学希望者が殺到し、昭和10年代には受験競争率が10倍を超え、横浜高商(現在の横浜国立大学)に比肩、もしくはそれ以上の人気を誇る超難関校となったのである(表1)<sup>63)</sup>。

### 第五節 学生騒擾事件への対応

しかし、澤田の学校経営は、全てが順風満帆に進んだわけではない。特に、昭和5年から7年にかけての社会・経済情勢の悪化は、高松高商にも深刻な影響を及ぼした。昭和5年10月30日に行われた「教育勅語頒布四十年記念式」において、澤田は「有史以来の世界大戦といふ大事変の後を受け」、「我が国にも此世界の悩みの浪が打ち寄せて来て思想の混乱、経済の動揺等が実に大」であるが、「徒らに一時の動揺に恐れ、手近な苦痛に脅かされて周章狼狽すべきでなく」、「聖天子を奉戴しつつ昭和の新時代に処すべき覚悟を国民全体が把持することが肝最要」であると、危機感を顕わに語っている<sup>64)</sup>。

当時の社会情勢は、上流学校の教育の基礎であった教養主義が次第に社会主義・共産主義へと傾斜し、左翼学生による「学生騒擾事件」の多発が問題視されていた。そこで、昭和3年4月、文部省は専門学務局に学生課を設置し、「思想善導に関する訓令」<sup>65)</sup>を発して諸学校に注意を促し、昭和4年7月には学生課をさらに学生部に昇格させ、学生の思想対策を重要政策として位置付けた。具体的な政策として、生徒主事の思想問題に関する講習会を開き、

学生生徒の訓育施設の充実を図る等、公正穏健な知識を与えることで健全な精神の涵養に努め、昭和5年度に高等学校、昭和6年度に専門学校・高等師範学校の社会問題・思想問題に関する特別講義制度を設け、さらに昭和7年8月に国民精神文化研究所を創設した。初代所長は、前述した関屋龍吉である。また、経済情勢は金融恐慌・昭和恐慌と続く慢性的な不況にあえいでいた。内務省社会局の調査によれば、昭和5年3月の学校卒業者の就職難は非常に深刻であり、未就職率は大学が41%、専門学校が46%、甲種実業学校が16%にまで落ち込み、卒業生総数の約40%が未就職という状況であった。高松高商の状況も非常に悪く、同年の卒業生149名のうち、卒業と同時に就職した者は約50名であり、その後就職の決まる者が増えたものの、かなり多くの者が未就職のままであった。そのため、高松高商では「二千余通の依頼状を関係各方面に発送するとともに、校長はじめ教授が直接出馬し、就職戦を展開」した<sup>66)</sup>。昭和4年9月に公開された映画『大学は出たけれど』は、まさにこうした鬱屈した時代相を映し出した名作であった。

昭和6年度以降、全国的な傾向として学生騒擾事件は減少するが、高松高商ではやや遅れて昭和6年夏に発生した。当時、「軍事教練四国一」との異名のある教練の厳しさに対して学生の不満が爆発し、校庭で配属将校を包囲すると、人権を無視した名札の廃止や、常軌を逸した軍事教練に抗議した。また同年秋には、3日間の強行軍の教練後に、学生代表が教官に1日の慰労休暇を願い出たが、教官がそれを無視したことで騒動が勃発した。学生達は善通寺駅ホームに座り込んで抗議を行い、これに対して学校側は学生達をねぎらう意味で1日の休暇を発表して、ようやく騒動は収まった。昭和7年2月には、寮務主任が「好ましくない人物」の入寮を拒否したところ、かねてから寮に対する学校側の統制に不満を抱いていた学生たちが学寮内でデモ活動を行い、寮務主任の宿直室に向かって消防用ホースで放水した。翌日、寮生代表が学校側に陳情したが容れられず、処分必死の形勢になったため、1・2学年生140名が学校の一角に集まり氣勢をあげたが、これにより学校側は穏便主義を採り、処分者を出さない方針を示して騒動は終息した<sup>67)</sup>。

しかし、同年10月の学生騒動事件<sup>68)</sup>では、学校側は明確な対決姿勢を打ち出した。学生の自治組織として、各クラスから選出された代表委員で構成される学生委員会を組織していた。彼らは春の体育祭、秋の運動会、及び開校記念祭における学生の自治を要望し、市中を放歌デモ行進する者まで現れた。これに対して学校側は、陳情したクラス委員代表6名を無期停学とする旨を発表し、しばらく学校側と委員会双方の応酬の後、最終的に放校1名、無期停学5名という処分が発表された。これに反発を強めた3年生の強硬派は、処分の即時解除と解決の際に犠牲者を出さないことの2条件を要求し、それらが受け入れられない場合、同盟休校することを申し合わせたのである。この動きに学校側は、「今回の事件に関しては危険思想にもとづく策動があるということを学校は確信する」との公式見解を発表し、全面対決の姿勢で臨んだ。

澤田は「意外にやさしく自由主義」<sup>69)</sup>であり、「如何なる思想を抱かうかは全く自由であって、私〔澤田〕はそれは尊重した」のであるが、「私の預かっている学校に騒ぎを起すということは断じて容れることはできない。それは別なことだと私は確信」していた<sup>70)</sup>。バカ騒ぎの一種であるストームのような学生文化は容認しても、思想問題に起因する事件は決して認めなかったのである。籠城する学生たちは「思想的背景ある事も絶対に無し」、「万一右背景ありたる時は我等は即時解散をちかふもの也」との声明を発表し、3年生の穏健派80名が署名血判の嘆願書を学校に提出した。事件はついにハンガーストライキまで発展したが、この後、次第に穏健派の影響力が増し、籠城する生徒たちの団結は崩れていった<sup>71)</sup>。また、父兄大会が開催され、籠城生徒に対して無条件解散、登校の説得が行われ、ようやく事件は収束に向かった。最終的に33名の無期謹慎、4名の譴責という処分で決着した。澤田は「一切の私情的なものを超えた冷厳な態度」<sup>72)</sup>で臨みつつも、「非常時<sup>マ</sup>体<sup>マ</sup>に拘らず筋目正しく温容を以て終始」<sup>73)</sup>し、事件を平和的解決に導いたと評価されている。また、澤田はこの事件を振り返り、後に「先生にも生徒にも〔共産〕黨員のあることが後に明らかになったが、ストに参加した人々は根強いものでなく謂はば引廻され踊らされたのであった」<sup>74)</sup>と同情する。第一線に現れない本当の首謀者を、澤田は敵視したのである。

#### 第六節 東京女学館に奉職するまでの過程

昭和14年4月、澤田は旧制浦和高等学校長に転じた。当時、浦和高等学校は旧制高等学校全体の中でも極めて優秀な学校であった。昭和2年から昭和15年までの間に、卒業生の東京帝国大学入学率は、66%と全国一位であった。以下、東京高校(65%)、静岡高校(57%)、一高(56%)、武蔵(56%)、さらに府立高、学習院、成蹊、水戸、八高が続いた。また、竹内洋の分析では、東京帝国大学進学をめぐる旧制高等学校を四類型に分けており、その中でも進学者数・進学率ともに優れる最高ランクのA群として、一高、浦和、静岡、東京が分類されている<sup>75)</sup>。転任の経緯は、文部次官石黒英彦<sup>76)</sup>が相談相手として澤田を引き抜いたためであった<sup>77)</sup>。その理由について、石黒は「寛〔克彦〕先生の教の信奉者だったし、同志の他の友人などの間接の勧めでもあったのかも知れぬ」と、澤田自身は回想している。寛克彦は東京帝国大学法科大学教授で、澤田が在学中、3年間にわたり行政法と法理学を教わり、「その哲学的御風格に大きな影響を受けた」<sup>78)</sup>人物である。当時の学生に多大な影響を与えていたといわれ、その信奉者は多かった。

しかし、昭和15年5月、澤田はわずか一年で東京美術学校長に転じた。同校の前校長・芝田徹心<sup>79)</sup>が、女子学習院長へ転じたことによる。澤田は専門学務局第二課長時代に美術行政に関係し、また澤田の兄・誠一が陶器の名匠であった関係から、任じられたと思われる。とはいえ、澤田にとって美術は門外漢に近く、ひたすら学校経営に専念するしかなかったという<sup>80)</sup>。澤田の学校経営は順調であったが、昭和19年に重大な問題が生じた。まさに国の

命運をかけた大戦争の折柄では、鷹揚に構える美術家への風当たりは強く、文部省専門学務局長・永井浩は、澤田に対し「美術学校を改革したいので全教授の辞表を出させてもらいたい」と依頼した。しかし澤田は、在任4年近くなり懇意になった教授を辞職させることはできないと断り、「それならば私がやめましょうということになって先ず私が辞表を出した」という<sup>81)</sup>。昭和19年5月20日、澤田はこうして官僚生活に終止符を打った。

澤田はその後、文部省の人の勧めにより東亜同文会の常務理事に就任した。東亜同文会は上海に東亜同文書院大学を経営し、外交官や実業界に多くの人材を輩出する傍ら、機関誌の発行を通じアジア関連情報の普及に貢献した団体である。会長は近衛文麿、副会長は阿部信行、副会長は津田静枝といった、政・軍双方の支那通が揃っていた。澤田は中国語が話せるわけでもなく、支那通でもなかった。しかし、教育関係の経験者が手薄という事情から推薦されたのであった。ところが、昭和20年8月15日に日本は敗戦し、会長の近衛文麿が12月16日に服毒自殺すると、澤田は他の理事一同と共に直ちに辞職した。その後は、東亜同文会の解散に伴う残務整理<sup>82)</sup>や、額田豊・晋兄弟の経営する帝国女子医学専門学校・帝国女子理学専門学校の大学への改組（後に東邦大学）に力を貸すなどして暮した<sup>83)</sup>。昭和20年4月の空襲で目白椎名町の家は全焼しており、澤田は東京に家がなかった。付近の家や知人の家を転々とし、夏に軽井沢千ヶ滝の別荘に移ったが、冬前に再び目黒に寄寓先を見つけ、東京に戻るという生活であった<sup>84)</sup>。東京女学館への就職は、そのような困窮した浪人生活の最中であった。

昭和21年11月の初め、文部省の旧知であった西河龍治から呼び出しを受けた澤田は、初めて東京女学館の構内に入り、面談する。この時、副館長・常務理事であった西河は健康を害しており、関屋龍吉、篠原三千郎の両理事も公職追放の対象者であった。そこで急遽、澤田に白羽の矢が立てられたのである。関屋が理事会に澤田を推薦したという<sup>85)</sup>。澤田は東京女学館について何の知識もなかったが、西河・関屋とも旧知の間柄であり、また幸いにも公職追放を受けなかった幸運から、東京女学館を引き受けなければならないと感じていた<sup>86)</sup>。こうして澤田は、昭和22年1月に理事へ就任し、たちまち西河に替わり常務理事・副館長となり、4月の理事互選で理事長、すなわち館長に就任したのである。

## 〈第二部 澤田源一の学校経営〉

### 第一節 澤田源一の思想、教育方針、及び学校経営方針

以上の来歴を踏まえつつ、澤田源一の思想、教育方針、及び学校経営方針を分析する。

澤田は、学校法人の理事長・館長でありながら、小学校長、中学・高等学校長、短期大学長を全て兼務した<sup>87)</sup>。したがって、澤田個人の思想、教育方針、学校経営方針を分析することで、東京女学館全体の学校経営を把握することができる。但し、澤田は東京女学館の学

校経営に民主的なプロセスを重視しなかったためか、当該期の理事会史料や政策決定過程を記した書類がほとんど残されていない。そこで、分析材料として主に東京女学館学友会発行の学内会報誌『菊』と、「澤田源一関係文書」<sup>88)</sup>を利用する。

東京女学館の学校経営は、澤田が最終決定権を握っており、その手法には「専制的なところもあった」という評価も聞かれる<sup>89)</sup>。当時、東京女学館教諭であった小玉寅雄によれば、「多数決を原理とする民主主義的な考え方よりも、哲人的に物事を洞察し、慎重に判断し、実行」するのが、澤田流の学校経営方針であった<sup>90)</sup>。また、澤田自身に言わせれば、政治の理想は「堯舜の道」であった<sup>91)</sup>。民主主義を「現代までに到達した最も無難なものとして実証されている」<sup>92)</sup>政治の基本原則であると認めつつも、「非常にりっぱな人で、非常に有力な人も一票だし、ならず者も暴力団も一票」では、「こんなにばからしいことはない。数でいくことなんてことは無意味」と考えていた。つまり、「とても私らが生きている間にはできない」究極の姿とはしつつも、「いわゆる権力」ではなく、「おのずからある種の非常な哲人、聖人というか、徳も力もりっぱな人に、みんなが崇拜してついていく」体制が、澤田にとって最高の政治的理想像であった<sup>93)</sup>。これこそ、まさしく戦前の内務官僚が地方官の理想として追い求めていた「牧民官」の姿そのものであった。したがって、澤田への評価は、「牧民官」の姿を認めるか否かで決まる。ある者にとっては「公正」<sup>94)</sup>そのものの人格者であったが、またある者にとっては専制君主に見えたといえよう。しかし、高松高商時代の評価にもある通り、澤田の判断は「冷酷なまでに公平で慎重」であり<sup>95)</sup>、「一切の私情的なものを交え」ることがなかった<sup>96)</sup>。また、東京女学館の戦後復興に果たした役割は極めて大きかったので、表立って批判されなかったのである<sup>97)</sup>。

再び小玉寅雄の証言によると、澤田は「学校長として、また理事長として、学校運営の最も重要なことを、しっかりと把握しておられるように見えた」が、「学級経営や教育方法等については、それぞれの教職員を信頼されて、その自主的運営にまかせ、ほとんど干渉されるようなことはされなかった」という<sup>98)</sup>。つまり、澤田の役割は教育内容の具体的指示ではなく、上流学校の大衆化という困難な事業を成功させることであり、具体的には大衆化を進めて規模を拡張していく学校経営であり、上流学校の品性を守るため教職員に明確な教育目標を示すことであった。新時代の到来に合わせた、建学の精神の新解釈が必要だったのである。

澤田の思想、教育方針は、東京女学館が昭和23年度に創立60周年を迎えるにあたり創刊した『菊』の分析から示すことが可能である。『菊』は、学生と教職員それぞれの寄稿文と、学内の出来事をまとめた記事から構成され、毎年一冊ずつ発行された。澤田は学校の代表者として、巻頭言に代えて毎回文章を寄せている。その内容をまとめたのが(表2)である。年度により紙幅は異なるが、毎回ただの挨拶文では終わっていない。ほぼ4頁以上の長文であり、時に政治的・哲学的に世相を論じ、生徒を教化する目的も垣間見られる。つまり、澤

(表2) 澤田源一館長の『菊』誌上への投稿内容

時期区分	年度	題名	執筆(発言)	刊行年月	頁数	内容概略	備考
第Ⅰ期	23年	講堂修築竣工式創立六十年記念式式辞	23年10月31日	23年12月	4	東京女学館の歴史。	<60周年> 『菊』刊行初年度。
	24年	記念式式辞	24年11月10日	24年12月	4	東京女学館の歴史。	
	25年	記念式式辞	25年11月10日	26年3月	4	東京女学館の歴史。	
	26年	記念式式辞	26年11月10日	(不明)	5	東京女学館の歴史、貴婦人への教育について。	
第Ⅱ期	27年	創立記念日に際して生徒諸子に望む	27年11月10日	27年12月	10	近代日本の思想の変遷、英国の耐乏生活と福祉の充実、独立自主の精神を養うこと。	<65周年>
	28年	トロット先生教育功労賞受賞を祝して	28年6月13日	28年11月	2	トロット先生への感謝。	
		創立六十五周年の記念日に当って	28年11月10日		8	人間の本分を果たすべきこと、中正の道を歩むこと、感謝の念を持つこと。	
		聞いたり、見たり、思ったり	28年11月15日	4	外国の流行を単純に追うのではなく真の姿を捉えること、日本の歴史に自信を持つこと。		
	29年	創立六十六周年の記念日に当って	29年11月10日	(不明)	8	東京女学館は品性を日本一に。	中学生と高校生に向けて、それぞれ話した内容を収録。
30年	所感	30年10月5日	30年11月	6	民主、自由、平和、幸福。		
第Ⅲ期	31年	思い出	31年10月1日	31年11月	4	青年期の澤田の姿。	
	32年	所感		32年11月	5	絶対一人の人を崇拜するのではなく、広く先哲の教を学ぶこと。	
	33年	創立七十周年に想う	33年11月	34年1月	13	東京女学館の歴史、激しい変化の中に変わらない本質的なもの、学校精神。	<70周年>
第Ⅳ期	34年	菊と柿		34年11月	6	秋に関する思い出。	
	35年	残る武蔵野		35年11月	2	武蔵野の思い出。	
	36年	時は流れる		37年2月	5	追憶の片々。	
	37年	春から秋へ	37年10月7日	37年12月	4	春・夏・秋の郷愁。	
第Ⅴ期	38年	七十有五年		39年3月	59	現在に至るまでの詳細な自伝的回想。	<75周年> 『菊』副題：東京女学館創立75周年記念号・現館長澤田源一先生の75寿を祝う号。
	39年	余滴	39年11月3日	40年3月	10	自伝的回想の追加。	39年6月に澤田の肖像建立。
	40年	国民・世論・近代		41年3月	6	世論に流されず、自主的な精神を持って善悪を見極めること。	
	41年	一日・一年	41年12月	42年3月	6	赤い夕日、菊にまつわる随想。	
	42年	思い出		43年3月	5	旧制中学・高校時代の思い出。	
	43年	八十年		43年12月	4	80年間の世相の随想。	
	44年	創立八十周年記念式の式辞	43年11月10日	45年2月	4	体育館・水泳プール建設。	<80周年>
		生活			4	空論をもてあそばす精神の健康に留意すること。	
	45年	所感	46年1月	46年2月	4	精神と日常生活の関係。	
	46年	追憶の一部	47年1月3日	47年2月	4	旧制中学・高校時代の思い出。	
	47年	追憶その二		48年2月	4	旧制高校・大学時代の思い出。	
	48年	創立八十五周年記念式典式辞	48年11月10日	49年2月	4	誠実・愛校心・誇りに対して日本一になってほしい。	<85周年> 『菊』副題：創立八十五周年記念号。当日録音の筆耕。
49年	(宮地治邦「追悼のことば」・高野敏雄「澤田館長先生を悼む」)		50年2月	2	澤田館長の追悼記事。	50年1月、死去。	

※暦はすべて元号(昭和)。

田にとって『菊』は、自分の思想を率直に披歴する場であり、また生徒を訓育するための重要なツールであった。

澤田の寄稿内容は論調が段階的に変化しており、これを凡そ以下の第Ⅰ～Ⅴ期に区分することができる。なかでも、第Ⅰ～Ⅱ期は日本社会が思想的に揺れた激動の時代であり、『菊』を教化ツールとして利用する意図が明確であった。第Ⅲ期以降は、思想的な教化ツールといった色彩は薄れてゆく。そこで本稿では昭和30年頃までを考察の対象とし、第Ⅰ～Ⅱ期について分析を加え、澤田の思想、教育方針、及び学校経営方針の特質を明らかにする。第Ⅲ期以降は、別稿で検討したい。

第Ⅰ期：昭和23～26年度（東京女学館の歴史を顕彰）

第Ⅱ期：昭和27～30年度（世相に惑わず教養・品性を磨くことを主張）

第Ⅲ期：昭和31～33年度（哲学的随想）

第Ⅳ期：昭和34～37年度（自伝的随想）

第Ⅴ期：昭和38～48年度（伝説化する澤田像）

## 第二節 第Ⅰ期（東京女学館の歴史を顕彰）の分析

第Ⅰ期は、毎年開催される創立記念式での式辞が、そのまま文章として掲載されている。澤田は創立記念式を、「当館の歴史を回顧し、同時に、将来に対する覚悟を新たにする機会」と捉えた<sup>99)</sup>。つまり、東京女学館の由緒正しく輝かしい歴史を伝えることで、東京女学館の生徒のあるべき理想像を示し、本校生徒としての自覚と使命感を喚起することが式の目的であった。澤田が総じて伝えたかったことは、「我が東京女学館は明治の初頭より、常に其時代時代の最新の文化を追求することに努めて来た」と全時に、いつも気品の高い校風を維持して来た<sup>100)</sup>という事実であった。そのため、式辞の後には明治時代の卒業生による懐旧談の講演（表3）を企画し、東京女学館がブランドであった「虎の門」時代について語ってもらい、生徒の理解を深めさせた<sup>101)</sup>。

澤田は、生徒の愛校心を喚起するために、一貫して強調したポイントがあった。式辞では建学の精神に対して年々新たな解釈が加えられ、澤田自身も東京女学館という学校の特質に対して理解が深まっていった過程を確認できるが、基本的な文章構成はほぼ同じである。特に、昭和23～25年の文章は極めて似通っており、以下、その代表として昭和23年の式辞<sup>102)</sup>を引用する。

抑も我東京女学館の歴史は明治十九年に遡るのであります。当時の内閣総理大臣兼宮内大臣伊藤博文伯其の他の各大臣及び在野の有力者渋沢、岩崎等の人々が相議して女子教育奨励会設立趣意書なるものを広く朝野に頒ちましたが、翌二十年一月十五日総理大

(表3) 東京女子学館創立記念式における来賓講演者一覧 (昭和23年～昭和33年)

年度	式典	対象	来賓講演者	身分	内容	抄録	
昭和23年	記念式		津軽理喜子	白菊会会員総代	(式辞)	有	
昭和24年	記念式		岸澄子	明治25年卒業生	懐旧談	有	
			大島ゆき	明治35年卒業生	懐旧談	有	
			八木澤しげ子	明治40年卒業生	懐旧談	有	
			乙竹清子	明治42年卒業生	懐旧談	有	
昭和25年	記念式		D.E.トロット	英語教師	懐旧談	有	
			荒畑文子	明治31年卒業生	懐旧談	有	
			城後貞子	明治32年卒業生	懐旧談	有	
			鈴木須磨子	明治34年卒業生	懐旧談	有	
			松本菊枝	明治37年卒業生	懐旧談	有	
			村岡花子	翻訳家・児童文学者			
			内村直世	高校生			
昭和26年	記念式・文芸講演会	中学生	横山美智子	小説家			
		高校生	森田たまた	随筆家			
昭和27年	記念式講演会	中学生	竹山道雄	評論家・元、東京大学教授	「人生について」	有	
		高校生	辰野隆	元、東京大学教授	「今昔」	有	
昭和28年	記念式講演会	中学生	幸田文	随筆家・小説家	「父露伴の教育について」	有	
		高校生	池田潔	評論家・随筆家	「イギリスの国民性の特徴について」	有	
昭和29年	記念式講演会	中学生	阿部艶子	小説家・評論家	女性の幸福		
		高校生	天野貞祐	元、文部大臣	幸福・道徳・自由、愛国心、天皇象徴問題		
昭和30年	(不明)						
昭和31年	(不明)						
昭和32年	(不明)						
昭和33年	ホームルーム	中学生	堀秀彦	評論家	「若さについて」		
		高校生	立花太郎	お茶の水女子大学教授	「科学について」		

※学内会報誌『菊』より作成。

※昭和30～32年度は、学友会活動の記録がなく、確認できず。

※昭和34年度以降も講演者の記録なし。

臣官邸に発起人会を開き、伊藤博文伯を創立委員長に推し、当時の有力者二十二氏を創立委員として発足し、「女子教育奨励会の経営する学校を東京女学館と称す」といふことを定めたのであります。かくて校舎として宮内省所管の麴町永田町の俗に雲州屋敷と称した建物を貸与せられることとなり、翌二十一年三月イギリスより婦人教師七名が着任して雲州屋敷の一部に居住し、開校の準備をしましたが、同年七月十日東京府知事の認可がありまして、茲に我東京女学館が誕生したのであります。実に今を去る六十年の昔であります。

開校後二年にして雲州屋敷の校舎を返還し、麴町区三年町即ち虎の門にあった旧工部大学校寄宿舎を借受けて之に移転したのであります。それが其後三十余年間の校舎でありまして、所謂虎の門の女学館と称せられた所以であります。然るに此の虎の門の校舎が不適當になって来ましたので、校舎を新築することとなり、渋沢、服部等の諸氏の御尽力によりまして資金を集め宮内省に対し渋谷羽沢御料地の内二千七百坪の貸与を願出で、大正十二年四月に至って其の許可を得たのであります。

東京女学館の歴史を解説する中で、澤田が強調し生徒に印象付けようと試みたことは、次の三点であった。

第一に、「内閣総理大臣兼宮内大臣伊藤博文」という当時最も影響力のあった人物が、政財界の大物や学校の実質的なパトロンとなった渋沢栄一・岩崎弥之助らと共同して、東京女学館を創立した事実を強調し、母校の権威を生徒に再確認させたことである。同様の表現は次年度以降の式辞にもあり、昭和24年度には「時の内閣総理大臣兼宮内大臣であった伊藤博文伯其他当時の朝野の有力者」<sup>103)</sup>となり、同25年度はさらに具体的に、「皇族数方を始め、明治の元勳である伊藤、山県、大隈、西郷、黒田、山田、松方、大山、井上等の諸氏、並に当時の華胄界、官界、学界、在日外国人等の各層に亘って、代表的有力者の殆んど凡てを網羅したのであります」<sup>104)</sup>と解説した。昭和26年度以降は、こうした明らかな権威付けは行わなかったが、それはむしろ東京女学館の伝統的な建学の精神、及び教育目標を強調するために、この点を抑えたものと考えられる。

第二に、用地確保の経緯から、宮内省、ひいては皇室という最も尊貴な対象との親近関係を示し、生徒に在学の誇りを与えようとしたことである。昭和23年当時、敗戦により国民全般の志気は未だ阻喪していた。しかし、澤田は「新日本の建設」のためには、まず「本校に学ぶ生徒達は、本校創立の趣旨と光榮ある伝統とを深く心肝に銘ずることが必要だと表明した」<sup>105)</sup>。また、昭和24年度の式辞においても、敗戦により「国民の生活は精神的にも物質的にも窮乏の極」に陥ったが、「ドン底から立ち上がらねばならぬ我が国には若い血潮の漲ぎった情熱が必要」であるとし、この劣等感を取り払うためには、「吾々は我が光輝ある祖先の歴史を忘れてはなりません。それには自らの尊さを自覚することです。そしてその自

覚からはおのずから、礼儀とか高い気品とかいうものが生れて来べきもの」であると述べていた<sup>106)</sup>。それゆえに、まず澤田は東京女学館の歴史を宣揚する必要があったのである。

第三に、「虎の門」というブランドの強調である。「虎の門」の通称は、一般に華美な生活文化や、お嬢様学校の雰囲気を感じさせた。しかし、澤田が生徒に対して最も意識付けようと試みた点は、そのような外面的な特徴ではなく、内面的な東京女学館の建学の精神であり、それに基づいた使命感を抱かせることであった。澤田は、「毎日の営みは、人類の幸福とか、世界の進歩とかの、大きな理想に結び付くときにこそ、吾々は生き甲斐がある」<sup>107)</sup>と考え、世界を舞台にわたり合うという大きな理想こそが、建学の精神であることを強調した。東京女学館の教育は、「明治以来勃興しつつあった『世界の日本』という自覚」<sup>108)</sup>のもと、「日本の最高水準にあるべき婦人を養成することを理想」<sup>109)</sup>とし、したがって、生徒はそれに近づく努力が必要であると主張したのである。

東京女学館のO.G. 団体である白菊会の会員総代・津軽理喜子は、昭和23年度の創立記念式の祝辞で、建学の精神は「先づ我国指導階級の婦人に欧米上流婦人と同等なる教育を施すという趣旨」であったと述べた<sup>110)</sup>。しかし、この建学の精神では大衆化に対応することができない。そこで、建学の精神に新解釈を加えようと試みたのが、昭和26年であった。津軽が述べたように、東京女学館は「指導者階級の婦人」を教育対象としていた。ところが澤田は、創立母体であった女子教育奨励会の規則の中にある、「日本の貴婦人に欧米諸国の貴婦人と同等な佳い教育や家庭生活の訓練を受けさせることを本旨とする」という一文をあげ、その意味は階級的な貴賤の別でもなく、外面的な華美豪奢でもなく、「欧米一流の人々と対等の交わりのできる人格や知性をもった、気品の高い、教養の深い、淑徳の婦人を養成せんとする、高い識見を標榜したものであった」<sup>111)</sup>と解釈した。つまり、戦後の上流学校の在り方は、一部階級の出身者に限らず、国際性に富み、品位・教養を十分に身に付けた人材を広く育成することであると結論づけたのである。

### 第三節 第Ⅱ期（世相に惑わず教養・品性を磨くことを主張）の分析（1）

#### ——教職員・講演者の論点——

第Ⅱ期は、澤田の教化的主張がさらに強く打ち出された時期である。その論調の変化は、世相の変化と軌を一にしている。昭和27年4月28日、サンフランシスコ講和条約が発効し、ようやく日本は独立を取り戻した。その一方で、GHQという籬が外れて左翼運動がいよいよ活発化・過激化した。日本共産党は、昭和26年10月の第5回全国協議会で、「日本の解放と民主的変革を、平和の手段によって達成しようとするのはまちがいである」とし、「武装の準備と行動を開始しなければならない」とする「軍事方針」を決定した。このいわゆる「51年綱領」を受けて、左翼学生運動は急激に過激な方向へと傾いてゆく。

昭和27年度のトピックは、「東大ポポロ事件」で大学自治権をめぐる争論が生じたことと、

破壊活動防止法（破防法）への反対運動であった。昭和27年4月17日、「暴力主義的破壊活動」を取り締まる破防法案が国会に提出された。これは、日本独立後の治安維持に備えた法律であり、具体的には、日本共産党などの「火炎瓶闘争」といった暴力活動を阻止することが目的であった。4月28日に全学連が破防法反対の全国的なストライキを決行すると、5月1日には警官隊とデモ隊が衝突して死者2名と負傷者千数百名を出した「血のメーデー事件」が起きた。その後も大規模な学生運動による事件が頻発した。

世情が殺伐とした中で、比較的穏健であった東京女学館も、強烈な危機感を抱かざるを得なかった。それは、『菊』の内容が一変したことから明らかである。従来、教職員の寄稿文は随筆的な内容が多かったが、昭和27年度の教職員の寄稿文は、生徒に対する明確な訓育的意図を含んでいた。例えば、渡辺松吾教諭は「正しく強く美しく」という文章を次のような記述で始めている<sup>112)</sup>。

これから述べる事は、私は正しいと信じているのですが、或は間違っているかも知れませんが。間違っていると思う方は、当然私の意見に反対なさるでしょう。私には自分の意見を皆さんに押し付ける意思はありませんから、反対する方をけしからんとは考えません。けれども、願があります。それは、先ず私の言っている事をよく理解するように努力して下さい、よく理解した上で賛成なり反対なりして下さい、という事です。相手の意見を十分に理解しようと努力もせずに、その時の気分や思いつきの考で、簡単に反対したり、けなしたり或は賛成することは、自己の無知と軽率とを暴露し、教養の低さを広告する以外の何物でもありません。

極めて異様な書き出しである。また、同様の「皆さん、先ず私の意見をよく理解するように努力して下さい」で始まる記述が、その後2パラグラフ連続で続く。生徒の思潮の中に、わずかながらも左翼学生運動の萌芽を見出しつつあったことを示しているだろう。渡辺が主張したのは、「モラルバツクボーン道徳的脊骨」の養成であった。道徳的脊骨とは「道徳に関する単なる知識、知っているというだけの知識ではない。単に知っているだけではなく、情意の中にまで染み込んでいる所の、骨の髄まで染み込んでいる所の、道徳そのもの」<sup>113)</sup>であり、「大東亜戦争」に惨敗した根本的原因の一つは、その欠如にあったとした。

また、道徳的脊骨が必要である理由を、次の二点から説明した。第一に、情と意の関係である。「私達を行動させる直接の力は、知ではなくて、意であり、それを強く推進するのは情である」から、人間は必ずしも正を行い不正を避けるとは限らない。「正は行わずに居られない」、「不正は死んでも行えない」という情があれば、それが意を動かして行動させる。それゆえに、「道徳に関する知識を有するだけでは不十分であり、それが情意にまで染み込まなければ本物にはなれない」とした<sup>114)</sup>。第二に、情と知の関係である。「情を主として行

動することは、往々にして危険を伴う。情は美しいものであると共に危険なものである。情にのみ支配されている人間は、気狂に近く、話相手にならない。それ故に、情は知によって規正せられる必要がある。而して、私達が実際に行動する場合、『知』（知識）を以て情を規正するだけでは、必ずしも十分ではない。『智』（知恵）が必要である」と解説した。そして、人生は理屈や議論だけで終わって実行されなければ何の価値もないが、知恵とは、「その事柄を如何にすれば理想に到達させ得るかを考え、又それを実行に移す所の知恵」であり、道徳的脊骨の重要な要素の一つであるとした<sup>115)</sup>。

以上のように論じた上で、「立派な人間と認める（また認められる）為の条件は色々あるうけれども、最も根本的な必要不可欠の条件は、道徳的見地から見て立派であるということ」であり、「従って、道徳的脊骨の有無・強弱は『人間』としての価値の有無・高下を決定するものであるから、私達はその養成に努めなければならない」と主張したのである。その養成には根本的な「正しくあれ、強くあれ、美しくあれ」という徳目を履践することにより、その他多くの徳も自然と行われるようになるとした<sup>116)</sup>。また、道徳的脊骨とは「正しい自我」、「附和雷同（やたらに他人に動かされ連られること）しない自我」であるとし、世相について、「民主主義という言葉が流行すると、民主主義とは如何なるものかを研究しようともせずに、分ったような顔をして、『民主主義・民主主義』と言う人、『日本人は今まで封建的であった。封建的なやり方は好くない』と聞かされると、封建的とは如何なることかを考えてみようともせずに、『今までの日本人のやり方は凡て封建的であり、封建的なものは凡て悪い』と断定する人、外国人の間に或る服装が流行すると、その服装を生んだ外国の社会基盤と日本のそれとの相違をも考えず、それが外国の如何なる種類の人達の中に流行しているかをも知らず、また、それが日本人に適当か否かをも考えずに、すぐに外国人の真似をする人、これは皆、道徳的脊骨を持っていない人々である」と批判を加えた<sup>117)</sup>。

続いて竹下敬次は「狐—Ressentiment 怨念の心理」で、狐が鳥をだまして、高い木になっているブドウの実を落とさせた物語に喩えて、左翼学生運動の本質を批判した。「狐に憑かれた人間とはよく聞く話だが、狐だって化かすからには、しっぽはおさえられないように巧みにかくしておく」のが普通であり、「そう簡単には化の皮をはがされるようなへま」はしない。したがって、「その正体を見破るのは容易なことではない」が、狐の物語に見る「食欲羨望、嫉妬、復讐の念、又巧言狡智は狐の正体の秘密と化かし方の一方法を示してゐる」として、左翼学生運動を引き合いに出している。大学自治権を理由として、「警官の権力乱用はいけませんが、自分達の濫用は一向かまわぬという論法」を用いる「黒狐」、貧しい間は全ての富を呪い、お金を魔物のように罵って精神家然としていた人間が、ひとたび終戦のどさくさまぎれに莫大な富を得ると一朝にして拜金家に変身する「金狐達」、特権階級打破のために血を流してまでも革命を起こしておきながら、指導者の座に立つと権力の上に胡坐をかき、異見を唱える者の首をいとも容易く切っていく「狼のように恐ろしい狐」、平和憲法

を叫びながら火炎瓶を投げたり、法廷で金切声をあげ高らかに合唱する「赤狐達」、男女同権の微風に帆をはらませて口汚く罵る女代議士流の「女狐達」である<sup>118)</sup>。渡辺や竹下の意見がどの程度教職員間に共有されていたのか分からないが、少なくとも澤田と同じ危機感を共有していたということはできる。女子の上流学校においても、左翼学生運動の過激化に危機感を抱き、理論武装が試みられていたことは注目に値する。

また、創立記念式の来賓講演者一覧(表3)からも、その変化が明らかである。昭和26年度以前の講演者は、東京女学館のO.G.や当時活躍していた女性であったのに対し、昭和27年度以降は一変して高名な学者や評論家、特に竹山道雄、天野貞祐といったオールド・リベラリストが招かれた。創立記念式は、東京女学館の歴史を語り生徒の自覚や使命感を引き出すだけでなく、激動の世相に対する思想的善導の場ともなっていたのである。昭和27・28年度の『菊』には、生徒の速記による講演の抄録が掲載されており、そこに教化的な意図のあったことは明らかである。例えば、竹山道雄は「人生について」と題し講演を行っている。現実の人生は、「若い時は社会的実力がなくて何も出来ず不平不満に満ち、中年になっては若い時にボヤッとしていたので世の中と戦っていく術さえ見出し得ず、晩年になってあゝ人生はこの様なものかと知る頃には死ななくてはならぬもの」であり、「ともかく人生とは悔の多い所」であるが、「最後に人生というものをさとした時にはもう人生は終り」である。つまり、人生には「解らないことを解らないまゝにきめなくてはならぬ」という法則があると主張する<sup>119)</sup>。そこで、時には危険を冒してぶつかっていくより他はなく、自分の決断を信じて行うしかないが、一方で「信念だけで事を行うのは案外まちがいが多い」とも指摘する<sup>120)</sup>。その例として、「俺はクリスチャンだぞ」という皮相的観念から人を見下げる態度、誠心誠意はあってもあまりにも狭すぎる考えで国を滅ぼした青年将校の態度をあげ、さらに「今日では、青年将校はなくなりましたが、左翼運動をしている人が同じ様に自分の信念だけで物事を押し量り、非常に視野狭くものをみる様です」という観察を披露している<sup>121)</sup>。また、左翼の思想構造に対して、「政治、歴史、文化、それは簡単に言えば色んなものがかさなりあって出来た複合物で、人種、風俗、伝統、政治関係と云うものが集って大きくなったのが文化で、この様な複雑なものの中から一つの要素だけをとり上げて、いっさいを割り切る事は出来るはずがありません」と批判を加えた。その上で、「よりよく生きようとするには決断、勇気、そして謙譲を忘れざる信念をもって進んでいくより他はない」のであり、言い換えれば「誠実」な態度が必要であるとまとめている<sup>122)</sup>。

#### 第四節 第Ⅱ期(世相に惑わず教養・品性を磨くことを主張)の分析(2)

##### ——澤田の論点——

澤田の寄稿文もまた、左翼学生運動の動向を明瞭に意識していた。(表2)に示される通り、第Ⅱ期の掲載ページ数は、それ以前の時期、あるいはそれ以後の時期と比べて多い。し

かも、その内容は政治問題や道徳問題に及び、かなり切り込んだ主張をしていた。第Ⅱ期における澤田の論点は、次の三点であった。第一に激変する世相に対処するための政治的指針を与え、取るべき態度を示したこと。第二に唯心論的発想から道徳を説いたこと。第三に道徳の実践方法を説いたことである。

第一の論点は、近代日本の思想の転変を俯瞰することで、現代の世相の行き過ぎた傾向を警告したことである。東京女学館が創立された明治20年前後には、「旧弊打破」や「文明開化」が叫ばれ、およそ60年を経た昭和21・22年頃には、「封建排撃」や「民主主義」が合言葉になっていた。これを、「最近の米国一辺倒とは多少趣を異にしますが、外国崇拜という点では似た点がある」と澤田は指摘した。その上で、「凡そ物事は行き過ぎの次には、その反動が来るのは自然の理」であり、「欧化主義の行き過ぎの後には所謂国粹主義が起こって来た」と説明し、現在の世相に注意を喚起した<sup>123)</sup>。すなわち、現在は「行き過ぎ」であると位置づけたのである。しかし、ここで矛盾が生じる。前年度の記念式辞までは、東京女学館の創立経緯から欧化主義を積極的に評価し、「所謂明治の黎明期であって、凡てのことを欧米先進国より学びとらねばならぬという熱意に燃え、上下挙って、欧米文化の摂取によって我国の文化を昂揚せんとしたとき」であったと説明していた<sup>124)</sup>。ところが、従来の価値観を顛倒させた結果、東京女学館の歴史を単純に顕彰し、建学の精神を称揚することが難しくなり、新しい教育方針を見出す必要が生じたのである。第Ⅱ期の文章が長きに亘るのは、その理論の組み直しを試みた痕跡であるともいえる。

このように歴史を俯瞰した上での澤田の結論は、有為転変の時流に流され、「浮草の如く漂流し、流行を追い、煽動に乗り、無節操に只之れ迎合を事とし、軽薄に附和し雷同」しないために、「強い自主自尊の心を涵養すること」であった<sup>125)</sup>。また、「その後に次々と国運を悲しむべき方向に引きずられた原因は、国民に自主独立の心が乏しく、無気力な追従に終始した為めであり、再び悲劇的結末を迎えないためには「自主自尊の気迫は益々之を培うことこそ最緊要事」であると主張した。その好例として、「大英国民の頑強さは真に敬服の至りであり、我国民のような、容易く熱し容易くさめる意思の弱い国民性と比較して誠に学ばねばならぬことが甚だ大」であると評価している<sup>126)</sup>。ただし、英国は福祉政策を充実させた結果、国民の勤勉意欲が減じて生産増強が鈍り、そのために未だに耐乏生活が続いているとも語っており、「余り働かずに細々とした生活するのがよいか、大いに働いて豊かな暮らしのできるのがよいか、後者を選ぶのが賢明であると思ふ」と、皮肉交じりに指摘した<sup>127)</sup>。これは、共産主義も暗に批判していたと思われる。英国の問題については、この次年度に池田潔を来賓に迎え、「イギリスの国民性の特徴について」と題する講演が行われていることから、澤田の中でかなり関心の高いテーマであったと思われる。自主自尊の精神を養うことについて、澤田は重要な注意を与えている。「徒らに同調追従することのない自主心」を保つと同時に、「も一つもっと大切なことは見識や視野を拡めること」とであると主張

する。また、自主独立を尊ぶとは人の自主独立を尊ぶことでもあり、「信念の為めには敢て争うも亦可なりですけれども、それと共に和することが更により高いものであることを考えるようにして頂き度い」とし、「毎日の生活に、知性を高め感情を豊かにし、義と愛の調和という高い理想を追求せられんことを望」んだ<sup>128)</sup>。澤田の主張をまとめれば、独立自尊とは社会に対する自覚であり、教養主義の重視であり、義や愛という社会に対する奉仕精神の重視であった。これは、前述した麻生誠の定義するエリートの一般条件と、期せずして全く同じ内容である。

第二の論点は、唯心論的な発想から道徳を説いたことである。『菊』誌上に投稿した文章の中で、澤田が唯心論的価値観に基づく表現をしたのは、昭和28年度が最初であった。ある神前結婚式に出席した時のエピソードとして、澤田は新郎新婦の前にある神棚には気が向かなかったといい、「誓詞の中で述べられた神様は、この二人の心の中に居らっしゃるのだと思った」という<sup>129)</sup>。超越的内在の自覚である。このように文章に唯心論的傾向が強まるのは、その翌年からである。例えば、原水爆への認識については、次のように説明している。原水爆そのものは恐ろしいものでも何でもないが、原爆を発明したのは人間であり、それを使うのも人間である。用いる人の心が、これを人間の幸福に使うと決心したならば、まことに有用になる。つまり、「要は人の心にある」のであり、物事について考える時、「心の問題こそが主座でなければならぬ」と主張した<sup>130)</sup>。また、心の善悪については、次のように説明する。「地球上に或時代に人間の生命というものが生れ、その人間に自覚という精神現象が顕われ、更に人間が現状に甘んじ得ずして理想を追求するという厳たる事実は、人間が希望なくしては、その存在の意義を持ち得ないことを証している」のであり、「即ち人類存在の意義は光明に向って進んでいる」と結論づけた<sup>131)</sup>。これは絶対善の認識であり、前述の超越的内在と併せれば、「善一元的唯心論」あるいは「唯神実相論」の思想が澤田にあったことを示している。

第三の論点は、道徳の実践の方法である。澤田は「心が行いに顕われ、行いが心に響き、己れを高め人を導きそして世の中が進む」と考えた。「心の問題こそが根本である」と信じる<sup>132)</sup>一方、「理屈ではなく実践のみが宗教であり道徳であり教育であり政治」であるという立場をとり、「現実を顧み、一事の善を積むことに努力」<sup>133)</sup>する、「行信不二」の実践的な態度を重視した。当然、心を磨く方法についても提唱したが、その内容は年によりやや異なる。昭和28年度は、(1) 正直であってウソをつかぬこと、(2) 人間の本分を尽くし、責任を果たすこと、(3) 常に中正の道を進むべきこと、(4) 常に感謝の念を持つこと、であった。また昭和29年度は、(1) 物事を正しく観察するように努めること、(2) 人の言辞を虚心に傾聴すること、(3) 物を読むこと、(4) 心を傾けて話し合うこと、であり、これによって「次第に高い思慮が築かれ、固い信念が培われて」いき、「そして思慮信念が一つ一つの行いに現われ、人格が向上し行動が洗練される」と主張した<sup>134)</sup>。以後、第三期（哲学的随

想)、第Ⅳ期(自伝的随想)、第Ⅴ期(伝説化する澤田像)と続き、それぞれ特徴的な論調が見られるが、これらの考察は別稿にて行いたい。

## おわりに——品性の重視と教養主義——

上流学校の強みは、理想として戴くに足る学校の歴史や建学の精神が存在し、厳選され積み上げられてきた文化資本(品性)が豊かなことである。しかし、戦後直後の厳しい学校経営環境では、より門戸を開放し大衆化を推進するほかなかった。そのため、建学の精神に大衆化を許容する新解釈を取り入れつつ、これまで培われてきた文化資本を如何に守るかが、上流学校に突き付けられた当時の課題であった。東京女学館でその難題に取り組んだのが、館長・澤田源一であった。

澤田は内務官僚から文部官僚に転じて教育行政に携わり、さらに文部省の直轄学校である高松高等商業学校長、旧制浦和高等学校長、東京美術学校長を歴任した、高等教育行政のエキスパートであった。そのため、澤田自身は女子教育では物足りず、東京女学館に長く在職するつもりはなかった<sup>135)</sup>が、激動の時代を館長として対処するうち、東京女学館と自身の年齢が重なっている奇縁もあり、次第に学校への愛着を深めていったと考えられる。澤田は民主主義を反知性主義であるとして、時には専断的な学校経営を行ったが、具体的な教育内容は教職員に一任していた。しかし、高松高商での同盟休校事件の経験から、左翼学生運動の影響が学校に及ぶことを危険視し、建学の精神を再解釈して、左翼思想の浸潤を防ぎ新時代に対応する教育理念を作り上げた。すなわち、それが国際性を重視し、品性と教養を重視する教育であった。この教育内容を追求することにより、東京女学館の建学の精神とも調和し、東京女学館の文化資本(品性)は守られると考えたのである。教養教育と躰教育はかなり厳しく行われ、入学式の折など澤田は常に「東京女学館生徒は、少なくとも教養の方面では日本一であると言われるようにしたい」と訓話していた<sup>136)</sup>。その姿勢は短大でも同様であり、学校の始業前にホームルームが行われ、大学に改編するまではかなり厳しく躰教育が行われた<sup>137)</sup>。ここが、澤田の教育方針の本質であった。

しかも、その教育内容は常に高いレベルを求めた。澤田にとって、東京女学館は「高い理想と永い伝統とをもっている」学校であるゆえに、行信不二の精神に基づき、実際に「最も優れた」<sup>138)</sup>日本一の学校でなければならなかった。この信念は終始一貫していた。例えば、昭和29年度の創立記念式では、「私が東京女学館を御預りしている者として、常に一刻も心から離れぬ私の念願は、東京女学館を日本一のものにし度いということです」と語っている。それは、校舎の壮かさや学力の程度ではなく、「お互の自省や心掛け」により品性を磨くことで、「その実力、その人柄、その行い等に於て、女子高校生の模範とするに足り、どの女子高校の人々よりも優れている人々になってほしい」という願いであった<sup>139)</sup>。また、昭和

48年度の創立八十五周年記念式典では、「日本一になりたいことは、その学校の職員や生徒の誠実さや、愛校心に於いて、ほこりを自覚できる事が重点です」と語っている<sup>140)</sup>。

しかし、澤田の教育理念は『菊』誌上以外に明文化されず、雰囲気としてのみ伝わったため、学外出身の関係者からは存在しないように見えた。さきにリーダーシップ論の先覚として取り上げた麻生誠も、その一人であった。麻生は平成16年4月から2年間、東京女学館の第13代館長となり、四年制大学に改編されたばかりの東京女学館大学の学長も兼ねた。麻生は退任後の回想で、東京女学館は「わが国の最も古い名門女子校」であるが、「後に明治三十年代に続々と創られる日本女子大学校、津田塾、東京女子大学校などと比べると、教育理念の面で見劣りする」と常々考えており、「東京女学館というと薄幸の名女優夏目雅子の出身校という頭の条件反射を起こしてしまう」という程度でしか認識していなかったことを明かしている。女性リーダーの創出を明確な教育的信念としていた麻生から見れば、そうした観点にかける東京女学館の教育は確かに「時代の限界」を迎えていた。「教育理念の面で確固たる不動の信念体系を欠いて」おり、今後は「教育理念と教育目標の明確化」が必要であると主張した<sup>141)</sup>のは、当然であった。その結果、学外出身の関係者が中心となり、インクルーシブ・リーダーシップ教育が取り入れられた。現館長・福原孝明によれば、その成果は近年着実に上がりつつあるという。しかし、新たな教育理念を導入する前提として、麻生らが東京女学館に「イデー（教育理念）がない」と断じた点は、本稿の分析から見ると明らかに誤りであった。したがって今後は、澤田の教育理念を再確認し、東京女学館の歴史・伝統を踏まえてさらに昇華させてゆく努力が必要である。

麻生の批判に対して、澤田はどう答えるであろうか。その疑問に対して、一つの示唆的な証言がある。皇太子成婚の翌年、非常勤講師であった田村幸策が「なぜ皇太子妃殿下は、東京女学館から、お出にならなかったのですか」と尋ねたところ、澤田は「それは私の教育方針ではありません」と答えたという<sup>142)</sup>。澤田自身は孫娘を米国の大学院に進学させたように、女性の社会的進出を理解していた一方で、そもそも東京女学館をそうした女性リーダーを育成する学校とは見做していなかったのである。いずれにせよ、品性と教養において日本一を目指した教育は確かに実績を上げ、昭和50年頃には社会的に高い評価を受けるに至った。大衆化は低俗化することなく達成されていたのである。その鍵は、澤田が主張した独立自尊の精神であり、社会に対する自覚であり、品性の裏付けとなる教養主義の重視であり、義や愛という社会に対する奉仕精神の重視であった。つまり、こうした真のエリート教育の実践にこそ、上流学校の価値は存在したのである。

## 注

- 1) 例えば、麻生誠はエリートを「全体社会のなかで、威信と権力と優れた技能（スキル）とを

- もち、一定の領域と水準における意思決定の働きを通じて、一定方向をめざした社会的指導力を発揮する機能集団である」と定義した。麻生誠『日本の学歴エリート』（玉川大学出版部、1991年）p.10。なお、本書は岩永雅也・木村涼子・山内乾史の解説を付して講談社学術文庫から改訂・出版された（麻生誠『日本の学歴エリート』講談社学術文庫、2009年）。本稿では、1991年版を用いた。
- 2) 麻生誠は、エリート分析の標本として『人事興信録』を利用した。そのメリットは、一応誰もがエリートだと思われる人々が選ばれており、その意味での社会的普遍性が保たれていることであるとしつつも、デメリットとして、ある特定の職業集団が実際に保持している権力や威信に比較して多く選ばれている可能性、潜在的な権力保持者が記載されていない可能性、エリート内の階層を無視して包括的に記載されていることを指摘している。麻生前掲書、pp.248-249。
  - 3) Pierre Bourdieu が提唱した概念（ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン：社会的判断力批判』藤原書店、1990年）。趣味判断は社会階級によって異なっているだけでなく、階級的地位を継承させるための資本として機能していることを実証的に示した。なお、文化資本の概念を用いた近年の研究として、数土直紀は文化資本の概念を用い、現代においてもなお学歴が階級帰属意識に強い影響力を及ぼし、同じ高学歴者であっても、親も高学歴という高学歴者の方がより高い階層的地位にコミットする傾向を析出している。数土直紀『日本人の階層意識』（講談社、2010年）pp.30-75。
  - 4) 麻生誠（『日本の学歴エリート』pp.266-268）をはじめ、既に多くの論者が指摘している。三谷博「帝国大学生の国内移動——両大戦間期における規定要因と地域間結合——」（年報近代日本研究会編『年報近代日本研究19 地域史の可能性—地域・日本・世界』山川出版社、1997年）pp.154-177、三家その「学歴エリートの輩出における地域的要因——大正期における高等学校への進学状況から——」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第45号、1999年3月）pp.276-288、及び竹内洋『日本の近代12 学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、1999年）pp.166-185。なお、麻生によれば、「旧制中学→旧制高校→帝国大学」というルートでエリートになれる者は、経済的にみて中流階級以上の子弟に限られ、そうでない場合には抜群の知的能力を備えた者が旧藩主の奨学制度の支援などによって例外的に進学可能であったと結論している。麻生誠「終章 展望と課題」（麻生誠・山内乾史編『高等教育研究叢書25 現代日本におけるエリート形成と高等教育』広島大学大学教育研究センター、1994年）p.54。
  - 5) 様々な出自のエリート（皇族・華族、政治家、財界・実業界、軍人、官僚、学者など）が複雑な婚姻関係を結んでいる。閨閥については、早川隆『日本の上流社会と閨閥』（角川書店、1983年）などの分析がある。なお、閨閥の中に東京女学館の出身者は多い。
  - 6) 華族制度が正式に発足して以後、養子縁組と並び、婚姻は親族間の多重ネットワークを築く重要な手段となり、玉石混交の家を同質的な「貴族仲間」に育てていく役割を果たした。また、婚姻は華族同士でなければならないという意識も強く残っていた。タキエ・スギヤマ・リブラ『近代日本の上流階級——華族のエスノグラフィー——』（世界思想社、2000年）p.141。
  - 7) 外務省特別資料課編『日本占領及び管理重要文書集』第1巻（東洋経済新報社、1949年）pp.91-108。
  - 8) 二荒芳徳「旧い思い出」（東京女学館学友会編『菊』副題：東京女学館創立75周年記念号・現館長沢田源一先生の75寿を祝う号、昭和38年度版）pp.22-23。
  - 9) 関屋龍吉「澤田源一君を偲ぶ」（東京女学館編『追悼』東京女学館、1975年）p.26。
  - 10) 澤田源一に関する個別研究は存在しないが、検討する材料は比較的揃っている。東京女学館

百年史編集室編『東京女学館百年史』（東京女学館、1991年）をはじめ、同書の著者の元木光雄氏による経歴の一考察（元木光雄「館長小伝」『菊』平成11年度版、pp.279-310）、澤田の人物像を綴った特集号（『菊』昭和38年度版）や、死去した際の追悼冊子（『追悼』）がある。また、平成24年8月3日、遺族より東京女学館史料編纂室へ「澤田源一関係文書」が寄贈された。関係文書の分析は、今後の課題である。

- 11) 麻生誠『日本の学歴エリート』pp.319-320。
- 12) ただし、軍の教育では教養主義よりも専門を重視し、共通の思考基盤が失われていった。また、補充基盤も同時に乖離していった（広田照幸『陸軍将校の教育社会史——立身出世と天皇制』世織書房、1997年や、保田卓・薄葉毅史・竹内洋「近代日本の学歴貴族の社会的出自と進路——第一高等学校入学調査票と同窓会名簿の分析から——」『教育社会学』第65集、1999年10月、pp.49-66を参照）。それによりハビトゥス（心の慣習、実践感覚）の違い（竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』pp.189-190）が生じ、両者の親近性が次第に失われ、昭和初期の政・軍関係に微妙な影を落とす一因となった。ただし、農業層出身の陸軍将校は傍流に留まり、先行研究の指摘する「陸軍将校＝農業層」対「帝大生・官僚＝新中間層」という図式は当てはまらないという研究（武石典史「陸軍将校の選抜・昇進構造——陸幼組と中学組という二つの集団——」『教育社会学研究』第87集、2010年11月、pp.25-45）もあり、今後改めて検討を要する。
- 13) 竹内洋は、英国のパブリック・スクールやドイツのギムナジウムがギリシャ語やラテン語や古典を重視したのは、自らの文化的淵源を確かめる目的であったが、日本にとっては異質な文化であった。したがって、旧制高校的教養主義は自国の文化とは遠い文化への憧憬に過ぎず、西洋文化への強迫的同一化であり、それゆえに日本の伝統文化からの離反を生み、西洋感染（かぶれ）を生み出したと説明する。竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』pp.264-268。
- 14) 竹内前掲書、pp.257-260。また竹内は、「旧制高校的教養がエリート文化を形成し選抜や昇進に際しての選別の基準として作用した。旧制高校的教養がない、あるいはないとみなされた者は選抜や昇進で不利になった」という、「教養の差異化・排除機能」を指摘している（同書、p.260）。
- 15) 地方名望家の研究は数多いが、例えば入手しやすい研究としては、以下の作品をあげることができる。田中和男「近代日本の『名望家』像——地方改良運動での『篤志家』と民衆——」（『社会科学』第37号、同志社大学人文科学研究所、1986年3月）pp.250-282、石川一三夫『近代日本の名望家と自治』（木鐸社、1987年）、高久嶺之介『近代日本の地域社会と名望家』（柏書房、1997年）。
- 16) 植松忠博「内務省の思想と政策——牧民官意識と社会事業行政を中心に——」（『国民経済雑誌』第174巻3号、1996年9月）pp.1-16、百瀬孝『内務省 名門官庁はなぜ解体されたか』（PHP新書、2001年）pp.98-101が参考になる。植松の指摘によれば、内務官僚は等しく「清廉・公平」と「牧民官」という意識を重視していた（同論文、p.4）。
- 17) 水谷三公氏の、「官僚ご自身が言われているんですが、威張っても天下国家のことを考えて一生懸命やっているのなら少々のことはやむをえない。こちらも納得できる。でも、権限だけを振りかざして内容が伴っていないと、我慢できないと感じますね」（中野翠・水谷三公「『公』の意識も美しい」『日本の近代 第13巻 付録8』中央公論社、1999年8月、p.7）という発言が、示唆に富んでいる。現代の官僚批判は、まさしく公の意識が薄く真のエリートとはいえない「学歴エリート」がもたらした病理現象である。

- 18) 麻生誠『日本の学歴エリート』、荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書、1995年）。
- 19) SIM Choon Kiat は、エリート教育では後者の二条件が重要であると、日本とシンガポールのエリート教育を比較しつつ指摘する。SIM Choon Kiat「日本とシンガポールにおけるエリート教育の現状と課題」（『SGRA レポート』No.54、SGRA、2010年5月）p.6。
- 20) 西欧人や西欧文化への同化という点では、総じて華族は一般的日本人よりも数世代先んじており、戦時中でさえも先祖の国際色豊かな文化遺産を完全に捨てていなかった。したがって、学習院、特に女子部では、他の公立学校では教えられなくなっていた「敵性語」の授業が続けられていた。タキエ・スギヤマ・リブラ『近代日本の上流階級』p.124。
- 21) その起源は、弘化4年に京都御所前に設けられた学習院に始まるという説もある。
- 22) 明治16年8月7日達。学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第1編（学習院、1981年）p176所収。
- 23) 「華族令制定ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A03022905500、公文別録・宮内省・明治十五年～明治二十五年・第一巻・明治十五年～明治二十五年（国立公文書館）。なお、明治20年までの華族関連の法令・達・告諭等は、「国立公文書館アジア歴史資料センター（JACAR）」で全225画像に及ぶ「華族須知」が公開されており、参考となる。「単行書・華族須知・明治二十年七月編成」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A07090090400、単行書・華族須知・明治二十年七月編成（国立公文書館）。
- 24) 学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史』上巻（学習院大学、2000年）pp.14-15。
- 25) 学習院女子短期大学史編纂委員会編『半世紀 学習院女子短期大学史 通史・資料編』（学習院女子大学、2003年）pp.6-8。
- 26) 華族女学校の教育理念は、「入校の女子は諸科の学術に熟達するのみならず更に道德の源に遡り各其地位に依りて孝順貞烈慈愛の徳を修め国家教育の本旨に背かざらんことを期す」という皇后の令旨に基づいたが、開学初期は宮内卿伊藤博文の欧化主義に影響を受け、欧化主義的な教育が行われた。しかし、伊藤が宮内卿を退いた後、明治21年に西村茂樹が華族女学校校長になると、西欧の文化知識の重要性は認めつつも、次第に欧化主義は修正されていった。真辺美佐「華族女学校校長としての西村茂樹——その学校改革と女子教育論をめぐって——」（『弘道』第116号、2008年3月）pp.53-76。
- 27) 外山正一、ジェームズ・メイン・ディクソンの提唱に内閣総理大臣伊藤博文が賛意を表し、総理官邸で発起人会が開かれた。その参加者（経歴は当時）は渡辺洪基（帝国大学総長）、富田鉄之助（日本銀行副総裁）、末松謙澄（内務省参事官、明治19年帰国）、外山正一（前・帝国大学総長）、穂積陳重（帝国大学法科大学教授）、神田乃武（帝国大学文科大学教授）、矢田部良吉（帝国大学理科大学教授）、陸奥宗光（外務省、明治19年帰国）、渋沢栄一（実業界・渋沢）、岩崎弥之介（実業界・三菱）、川田小一郎（実業界・三菱）、福地源一郎（東京日日新聞主筆）、ジェームズ・メイン・ディクソン（帝国大学文科大学講師）、アレキサンダー・クロフト・ショー（英国聖公会）、エドワード・ピカステス（英国聖公会、明治19年来日）等であった。東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』。
- 28) 「女子教育奨励会規則」（東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』）pp.28-29。
- 29) 結局、東京以外に女学館が設立されることはなかった。
- 30) 明治21年4月27日「女子教育奨励会東京女学館規則書」（東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』）p.71。

- 31) 東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』p. 72。
- 32) 「女子教育奨励会東京女学館規則書」(東京女学館百年史編集室編『東京女学館百年史』) p. 73。
- 33) 官僚の学歴・出世に関する研究は多いが、本稿では主に、麻生誠『日本の学歴エリート』、水谷三公『日本の近代13 官僚の風貌』(中央公論新社、1999年)、副田義也『内務省の社会史』(東京大学出版会、2007年)を参考とした。また、特に「大学成績の威信効果」について研究を加えたものとして岩田弘三「戦前期におけるエリート選抜と大学成績の関係——東京帝大1～2番卒業生の経歴を中心に——」(『教育社会学研究』第82集、2008年6月) pp.143-163がある。
- 34) 英語法律・政治・経済・商科の諸学科進学予定者のコース。麻生誠によれば、官僚のほとんどは第一部甲類と第一部丙類(独語法律・政治・独語文科進学予定者のコース)の出身であった。麻生誠「大正初期～昭和初期における高等教育機関のエリート形成機能に関する研究」(『日本育英会研究紀要』第2号、1964年) pp.4-5。
- 35) 第三高等学校、東京帝国大学法学部、そして文部省の後輩である有光次郎の証言。有光は戦後、六・三・三制への移行時に文部事務次官を務めた人物である。また、澤田没後に第9代の宮地治邦を挟み、東京女学館の第10代館長に就任した。有光次郎「澤田源一先生を偲ぶ」(『追悼』) pp.17-18。なお、同期生の細溪宗次郎によれば、澤田の卒業成績は第一部甲類のトップであった。細溪宗次郎「私の追憶」(又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』又信回顧三十五年刊行会、1959年) p.160。
- 36) 水谷三公『官僚の風貌』p.174。
- 37) 澤田の経歴は、澤田源一「七十有五年」(『菊』昭和38年度版) pp.101-159が詳しい。
- 38) 当時、岩手県師範学校附属小学校にいた佐藤瑞彦は、「長老の県立校長連に礼讓をつくされて全く以て立派な牧民官ぶり」を發揮し、「忽ちにして『沢田株』が上がってしまいました」と証言している。佐藤瑞彦「端麗長身の学務課長」(『菊』昭和38年度版) p.11。この高評価が転出に影響したとも考えられる。
- 39) 大霞会編『内務省史』第1巻(原書房、1980年) p.635。
- 40) 内務官僚の転出と出世については、副田義也の分析(副田義也『内務省の社会史』pp.511-514)が参考になる。
- 41) 例えば、高等文官試験の行政科出身者は、全時代を平均して4～5人に1人、外交科は2人に1人しか勅任官になることはできなかった。秦郁彦『官僚の研究 不滅のパワー・1868-1983』(講談社、1983年) pp.24-25。
- 42) その間の経緯は、関屋龍吉「澤田源一君を偲ぶ」(『追悼』) pp.25が詳しい。
- 43) 季武嘉也・武田知己編『日本政党史』(吉川弘文館、2011年) pp.117-118。
- 44) 関屋は、昭和4年に文部省社会教育局の初代局長となり、また昭和9年には国民精神文化研究所の初代所長となった、青年教育・社会教育の専門家である。
- 45) 松浦は、文部省の中枢にあり続け、大正13年には文部次官に就任した文部官僚の代表的人物であった。その後、昭和2年に京城帝国大学総長、昭和4年に九州帝国大学総長(昭和11年まで)、昭和5年に貴族院勅選議員(昭和13年まで)、昭和13年に枢密顧問官となる。昭和14年に東京女学館館長となったが、昭和15年の米内光政内閣で文部大臣となり、その時に東京女学館館長を辞任し、以後澤田が就任するまで館長は空位だった。
- 46) 当時の専門学務局の業務と澤田との関係は、野口明「東京女学館と澤田さん」(『追悼』) pp.30-31、野口明「最初の課長さん」(『菊』昭和38年度版) pp.14-15が参考になる。
- 47) JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. A03021163300、御署名原本・大正七年・勅令第三百

- 八十八号・大学令（国立公文書館）を参照。第四条において「大学ハ帝国大学其ノ他官立ノモノノ外本令ノ規定ニ依リ公立又ハ私立ト為スコトヲ得」と規定された。
- 48) 関屋龍吉「澤田源一君を偲ぶ」（『菊』昭和38年度版）p.26。
- 49) 澤田源一「七十有五年」（『菊』昭和38年度版）p.138。
- 50) 「当時県下における本校校長の社会的地位は普通寺師団長のつぎで、プライドの点では余人にひけをとらなかつた沢田青年校長は、なにかの儀式で県知事などの車がたまたま前にでもいると、すぐ運転手に命じてこれを追い抜かせたというエピソードもある」（又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』p.53）という。内務官僚への対抗意識からであろうか。
- 51) 澤田は「私は文部省官房秘書課長から、数え年40の青二才で而も当時の所謂勅任官になって来たのだから、先づ栄転という処であつたらう」と自己評価する。澤田源一「思い出辺々」（又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』）p.153。
- 52) 澤田が文部省の中樞にいたことは、学校経営の面で有利に働いた。「設備の改善などは大したことを私はしなかつた様に思うが、それでも文部省の会計課には私が本省に居た関係で多少無理が通って、予算を取ってきては逐次出来た様に思う」。澤田前掲論文、p.154。
- 53) 又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』p.49。
- 54) 作道好男・江藤武人編『香川大学経済学部五十年史』（財界評論新社、1977年）pp.90-91。高松高商で開催された一覧は、山本珠美「『三十年のあゆみ』補遺——高松高等商業学校における開放事業——」（『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第14号、2009年3月）pp.23-27に掲載されている。
- 55) 高松高商の地域社会に向けた講座等の一覧は、山本前掲論文、pp.17-45を参照。
- 56) 学友会組織は、開校した大正13年に「高松高等商業学校学友会」として発足した。しかし、文部省の修練組織確立の方針に基づき、昭和15年11月に解散、「高松高等商業学校報国団」と改めたが、昭和20年9月に解体された。学友会の活動実績については、作道好男・江藤武人編『香川大学経済学部五十年史』pp.577-623、及び又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』pp.73-77が詳しい。
- 57) 水泳部は、西部高商大会及び全国高商大会で8連覇。また、昭和10年に関西学生水上競技大会第2部優勝、昭和11年・13年に優勝。剣道部は、岡山医大主催の全国高専大会で昭和11年から13年まで3連覇。昭和13年の東京における全国高専大会で優勝。籠球部は、西日本大学高専選手権大会で昭和12年から14年まで3連覇、昭和13年の全国高商大会で優勝した。
- 58) 又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』p.153。「年々阪神、京浜を巡ったり、時には関門や山陽の諸都市へも運動に行った。日銀の大阪支店長だった中根理事や第一銀行の大阪支店長だった田中二郎氏などは仲々親切に助力して下さった。三菱銀行の高木健吉君や住友の坂本信一君次で今井卓造君など私の友人も方々に居ったので気持ちよく運動できた」と、澤田は回想している（同書、p.154）。
- 59) 澤田は学生の就職活動のために、かなり精力的に動いていた。「卒業生も毎年約百五十名だが、商科大学に進学する者が年々幾人かある外は殆んどが就職希望である。それ等の人達の就職の世話が学校長の仕事の大きな一つであった。そのため毎年京浜、阪神はもとより中京、中国の都市、関門北九州と各地に繁く出張し、官庁、会社、銀行の幹部に頼んで歩いた。最初の年には、私の文部省の時の大臣であった三土忠造先生は、蔵相もされ又香川県が御郷里でもあるので、私のために財界など方々へ紹介状を下さったり、又私の赴任の際には在京の県人会に特に私を紹介して下さったりして鞭撻して下さった。」（澤田源一「七十有五年」『菊』昭和38

- 年度版、p.139)。また、「高松市在勤の他の官庁の首脳者や地元の有力な銀行会社の幹部も加え十数人が毎月一回定例の中食会を催したりして懇意になった」(同論文、p.141) ことも、就職に好影響であったかと思われる。
- 60) 「方々の会社を訪問して銓衡試験の様様や会社幹部の希望などを参考にして、第三学年の学年末数時間を割いてもらって、よく就職に対する心構等を説いたりしたものである。面接の控室に於ける態度がキチンと採点されてあったり、答案紙の表裏の注意を怠ったために不合格にされたりした実例などを話したこともある。又会社の名前だけに眩惑してその実態を知らぬのが学生や父兄の常だから、そういうことの啓蒙にも苦心した。」又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』p.154。
- 61) 大平はその後、就職を経て東京商科大学に入学。高等文官試験に合格し、大蔵省に入る。その後、池田勇人に誘われ政界に入り、外務大臣などを歴任。最後は内閣総理大臣在任中に死去した。「澤田源一関係文書」(東京女学館所蔵)には、大蔵官僚時代の大平の名刺が二枚残っている。なお、大平は澤田の葬儀で参列者代表を務めている。
- 62) 卒業生の経歴は、作道好男・江藤武人編『香川大学経済学部五十年史』pp.681-780 に詳しく収録されている。
- 63) 又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』p.53。
- 64) 「沢田高等商業学校長謹話 香川新報」(作道好男・江藤武人編『香川大学経済学部五十年史』) pp.129-130。この式典の意義は、岩田一正の検討(岩田一正「1930年前後の学校紛擾に見られる大学の共同体化への希求——早稲田大学同盟休校を中心に——」『成城芸芸』第218号、2012年3月、pp.65-84)が参考になる。
- 65) 作道・江藤前掲書、pp.115-116。「曩時世界の大戦乱ありし以来欧州諸国が政治経済其他の社会状況に变革動揺を生じたるに伴ひ国家社会に対し奇矯過激なる新説を唱道するの徒」が出現しつつある中、日本でも「国体に背き国情に悖るの思想を懐抱する者あるの傾向」が生じ、「共産党事件に干預」する者も出現しつつあることに警鐘を鳴らしている。
- 66) 作道・江藤前掲書、pp.130-131。また、この文脈で考えるならば、昭和4~5年頃から見られる地域社会に対する映画会や校外講演活動の増加(統計は山本珠美『三十年のあゆみ』補遺——高松高等商業学校における開放事業——)『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第14号、2009年3月を参照)は、山本の指摘するように専門学校による地域との結合志向や拡張運動に対する歴史意識(山本珠美「日本の大学開放史研究に関する覚書——旧制専門学校の取組について——」『教育実践研究』第3巻、2009年3月、p.52)だけでなく、就職問題の解決を見据えた学校の営業活動の一環であるとも考えられる。
- 67) 作道・江藤前掲書、pp.137-138。
- 68) 作道・江藤前掲書、pp.138-143。
- 69) 矢野良臣「若い校長先生」(『菊』昭和38年度版) pp.32-33。
- 70) 澤田源一「思い出片々」(又信回顧三十五年刊行会編『又信回顧三十五年』) p.154。
- 71) この時、澤田の養子(澤田庸)が2年生で在学しており、藤本捨助教授の回顧によれば、澤田庸が事件の鎮静に役割を果たしていた可能性もある。「もとより、君が優良なる学生として、よく勉強し、寡言実行、以て学生間に重きをなして居た事もまた、私の記憶に今なほ顕著な事であるが、しかし、私をして、最も感銘し、最も信頼し、苟くも男子として、大義名分を弁へ、血盟して事を共にすると云ふが如き関頭に立ち、真に信頼するに足る人物として、畏敬せしむるに至らしめたのは、何としても、あのストライキ騒ぎの時であった。それを追憶すること

- は避けるが、アノ時君の新年より送り出た毅然たる態度は、確かに、過誤にあった学生の、正義感をよび戻すに十分であった。」藤本捨助「澤田庸君を憶ふ」（久家恒衛『澤田庸追悼録』私家版、1938年）p.114。
- 72) 大泉行雄「沢田先生の横顔」（『菊』昭和38年度版）pp.3-4。
- 73) 本田治夫「沢田先生を想ふ」（『菊』昭和38年度版）pp.23-25。
- 74) 澤田源一「七十有五年」（『菊』昭和38年度版）p.141。なお、翌年高松検事局により香川県下の一斉思想取締り（高松八・三・三事件）が行われたところ、その大部分が高松高商の生徒であり、香川新報によれば「高商内文化班を組織し、各班に組織部、教育部、対外部等を設け、積極的に対学闘争を進め、実質的には共産青年同盟の指導下に活動した」ことが明らかにされた。中心メンバー3名と教授1名が起訴された。作道好男・江藤武人編『香川大学経済学部五十年史』pp.146-147。
- 75) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』pp.127-128。
- 76) 昭和13年12月から昭和14年9月まで文部次官を務めた。
- 77) 澤田源一「七十有五年」（『菊』昭和38年度版）p.144。
- 78) 澤田前掲論文、p.112。
- 79) 第八高等学校長、文部省図書局長などを歴任。
- 80) 澤田前掲論文、p.146。
- 81) 澤田前掲論文、p.147。
- 82) 澤田前掲論文、p.148。
- 83) 澤田前掲論文、p.150。
- 84) 澤田前掲論文、pp.148-150。
- 85) 関屋龍吉「澤田源一君を偲ぶ」（『追悼』）pp.26-27。
- 86) 澤田源一「七十有五年」（『菊』昭和38年度版）pp.151-152。
- 87) 昭和22年に新制中学校長、23年に新制高等学校長、26年に小学校長となり、さらに昭和31年の短期大学創立後はその学長も兼ねた。この兼任体制は、澤田から始まった。
- 88) 平成24年8月3日、澤田源一の孫にあたる岸本宏子氏（昭和音楽大学音楽学部教授）に聞き取り調査を行った際に寄贈された。「澤田源一関係文書」の分析は本稿で尽くせず、あらためて別稿で分析を加える。なお、岸本氏は家族から見た澤田像を書き残している（岸本宏子「思い出」『追悼』pp.12-16）。
- 89) 「創立百二十周年記念座談会 PART I」における本橋明（小学校教諭・函工、在勤：昭和32～平成18年）の発言。東京女学館創立百二十周年記念誌編纂委員会編『東京女学館創立120周年記念——回想・東京女学館の教育——』（東京女学館、2008年）p.59。また、その学校経営手法のために「教職員のなかには澤田先生の人間性を知ることができず、ただ畏敬したり、なじめが薄かった等として、真の澤田先生を理解することができず過ぎされたこともあった」という（小玉寅雄「澤田先生のこと」『追悼』p.87）。ただし、高松高商時代には「民主主義のルールに即して、誠に恩威並び行われた」と評価されている（藤本捨助「沢田校長に学ぶ」『菊』昭和38年度版、p.21）。高松高商では教官団の学識を信用し、東京女学館では信用に足る学識者を見出さなかった、という仮説も考えられる。
- 90) 小玉寅雄「澤田先生のこと」（『追悼』）p.87。その他に、「創立百二十周年記念座談会 PART I」（東京女学館創立百二十周年記念誌編纂委員会編『東京女学館創立120周年記念』）pp.59-61は、当時の教職員の澤田評を確認することができる。

- 91) 澤田源一「連載対談(17) 長寿万歳 教え子に贈るもの——生きつづけるわが心にも…」  
『西医学』34巻2号、西会、1971年8月号) p.20。
- 92) 澤田源一「所感」(『菊』昭和30年度版) p.2。
- 93) 澤田源一「教え子に贈るもの」(『西医学』34巻2号、西会、1971年8月号) p.20。
- 94) 山崎美一「澤田館長の死を悼む」(『追悼』) p.76。
- 95) 大原瑛子「いつも完敗の記」(『追悼』) p.59。
- 96) 「教職員に対する館長先生の態度は温かであった。同時に公正を旨とされていた。人事は一に関係規則やその他基準に則り、一切の私情的なものを交えられなかった。ある会議のあと、談、たまたま人事のことにふれられたとき『私は人事を行うに際しては、いつも神様が我が後ろに立って観ていられる気持ちでやっている。』と語られたことが想起されるが、これも所信を行うに公正と信念の固さを冷厳に示されたものであった。」山崎美一「澤田館長の死を悼む」(『追悼』) pp.76-77。
- 97) 例えば、澤田の学校経営について、有光次郎は次のように証言する。「終戦後間もなくから、東京女学館の再建一途に打ちこんでこられた先生の姿勢と熱意と識見には、関係者誰一人として服せざるはなかつた。まことに見事な推進ぶりであったが、それは旺盛な責任感に裏打ちされた采配のふりかたが、しかも人に絶対の信をおかれた温容と相まって、万人の心をしっかりと掴んでおられたからこそ、可能であったと思われる」。有光次郎「澤田源一先生を偲ぶ」(『追悼』) pp.18-19。
- 98) 小玉寅雄「澤田先生のこと」(『追悼』) p.86。
- 99) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和25年度版) p.10。
- 100) 澤田前掲論文、p.13。
- 101) 例えば、虎の門時代の卒業生は次のように語っていた。「昔の女学館の生徒は真面目で御座いました。品もよろしう御座いました。其ころとむろん今も変わりませんが、どうぞ何時までも此の良い校風を失はない様にお願ひ致します。」(明治42年卒業生乙武清子「母校六十周年につき思出のまゝ」『菊』昭和23年度版、p.9)、「女学館の生徒は、何処へ出しても恥かしくないといはれ、又それだけに修養を積んで居りました。どうか皆様も、東京女学館の生徒として恥かしくない様な態度をなさって下さいませ。」(明治40年卒業生八木澤しげ子『菊』昭和24年度版、p.13)、「只今も普通ではないと信じますが、当時此学校では特別上品な英国式教育が授けられ、随って英語は他の追隨を許さぬ程進んで居たようでした。」(明治31年卒業生荒畑文子『菊』昭和25年度版、p.15)。
- 102) 澤田源一「講堂修築竣工式創立六十年記念式式辞」(『菊』昭和23年度版) p.2。
- 103) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和24年度版) p.6。
- 104) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和25年度版) p.10。
- 105) 澤田源一「講堂修築竣工式創立六十年記念式式辞」(『菊』昭和23年度版) p.5。
- 106) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和24年度版) p.8。
- 107) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和25年度版) p.13。
- 108) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和26年度版) p.4。
- 109) 澤田前掲論文、p.3。
- 110) 澤田源一「講堂修築竣工式創立六十年記念式式辞」(『菊』昭和23年度版) p.5。
- 111) 澤田源一「記念式式辞」(『菊』昭和26年度版) p.2。
- 112) 渡辺松吾「正しく強く美しく」(『菊』昭和27年度版) p.18。

- 113) 渡辺前掲論文、p.19。
- 114) 渡辺前掲論文、pp.19-20。
- 115) 渡辺前掲論文、p.20。
- 116) 渡辺前掲論文、pp.21-22。
- 117) 渡辺前掲論文、pp.23-24。
- 118) 竹下敬次「狐—Ressentiment 怨念の心理」(『菊』昭和27年度版) pp.33-34。
- 119) 竹山道雄「人生について」(『菊』昭和27年度版) p.105。
- 120) 竹山前掲論文、p.106。
- 121) 竹山前掲論文、pp.106-107。
- 122) 竹山前掲論文、p.107。
- 123) 澤田源一「創立記念日に際して生徒諸子に望む」(『菊』昭和27年度) p.2。
- 124) 澤田源一「記念式辞」(『菊』昭和26年度版) p.2。
- 125) 澤田源一「創立記念日に際して生徒諸子に望む」(『菊』昭和27年度) p.10。
- 126) 澤田前掲論文、p.5。
- 127) 澤田前掲論文、pp.6-7。
- 128) 澤田前掲論文、p.10。
- 129) 澤田源一「聞いたり、見たり、思ったり」(『菊』昭和28年度版) p.12。
- 130) 澤田源一「創立六十六周年の記念日に当って」(『菊』昭和29年度版) p.7。
- 131) 澤田前掲論文、p.8。
- 132) 澤田前掲論文、p.7。
- 133) 澤田源一「創立六十五周年の記念日に当って」(『菊』昭和28年度版) p.8。
- 134) 澤田源一「創立六十六周年の記念日に当って」(『菊』昭和29年度版) p.5。
- 135) 元木光雄「館長小伝」(『菊』平成11年度版) p.302。
- 136) 山崎美一「澤田館長の死を悼む」(『追悼』) p.76。
- 137) 平成24年8月22日の石上七鞆(元、東京女学館短期大学教授)・松木裕美(東京女学館大学教授)への聞き取り調査における松木氏の発言。なお、両氏とも、内部進学者が激減した平成5～6年頃から、学生の質が落ちたように感じられたと証言する。東京女学館中学・高等学校の生徒の躰は、他の公立校などからは抜きん出ているという。
- 138) 澤田源一「記念式辞」(『菊』昭和26年度版) p.1。
- 139) 澤田源一「創立六十六周年の記念日に当って」(『菊』昭和29年度版) p.4。
- 140) 澤田源一「創立八十五周年記念式典式辞」(『菊』昭和48年度版、巻頭特集)。
- 141) 麻生誠「反省とお詫びと激励と」(東京女学館創立百二十周年記念誌編集委員会編『東京女学館創立120周年記念』) pp.5-7。
- 142) 昭和50年2月26日の学校葬における、教職員代表田村幸策の弔辞。『追悼』巻頭特集に所収。

#### ENGLISH SUMMARY

**Popularization of “Elite School” and Liberal Arts Education (Kyoyoushugi) :  
School Management of Gen-ichi SAWADA, Principal of Tokyo Jogakkan School  
HAMADA Hidetake**

If the group of elites who occupied the leading positions of the upper ranks in politics, the economy, the

military and academia in pre-war Japan is called the “Elite Class”, then the schools established for the purpose of educating their children or training talented people to be new members of that class can be called “Elite Schools”. In the post-war era, the schools were obliged to popularize Popularization would easily mean inferiority. Then, how were they popularized without disobeying their original motto, and what did they do to protect their cultural capital? In this paper, I examine the case of Tokyo Jogakkan School, one such “Elite School” as well as a Peeress School (学習院女子部), by analyzing the individual of Gen-ichi SAWADA, the school’s principal who approached school management arbitrarily. Particularly, I focus on his activity as an official of the Home Department, the Educational Department, and the school under their direct control, and refer to the process of his reinterpretation of the school motto, described in the school intramural magazine “Kiku”, to consider the popularization of “Elite Schools”.

*Key Words:* official of the Home Department, Takamatsu Higher Commercial School, Tokyo Jogakkan School, Elite Education, idealism